

平成25年度第1回協働事業評価会

平成25年10月30日（月）午前9時00分

区役所本庁舎 6階 第4委員会室

出席者：久塚委員、宇都木委員、竹内委員、野口委員、太田委員、伊藤委員

事務局：地域調整課長、濱田協働推進主査、西堀協働推進主査、高橋主任

久塚会長 関口委員、井下委員は今日は欠席とのことですが、定足数は足りていますので、これから第1回協働事業評価会を開催したいと思います。

事務局 おはようございます。それでは、本日委員にお配りさせていただきました資料のほうを確認をお願いいたします。

まず表紙に次第をお配りしてございます。きょうのヒアリングは9時5分から新宿アートプロジェクト、そして10時5分から街角スポット活用事業になります。

1枚おめくりいただきまして資料1が協働事業評価書で、最初が新宿アートプロジェクトのほうになります。資料1-2が街角スポット活用事業です。

資料2が、平成25年度協働事業評価スケジュール予定表になっております。後ほどこれは説明いたします。

一番最後は、参考資料といたしまして「協働事業の評価にあたっての主な着眼点」でございます。

そのほかに本日は10月3日付で事前に配付いたしました資料がございます。もしお持ちでなければ今お渡ししますので、皆さまお持ちでしょうか。

それと、追加で新宿アートプロジェクトさんのほうからカラーの写真をいただいておりますので、お手元にお配りさせていただきました。

久塚会長 ありますか。

事務局 はい。そのほかにいろいろ協働事業、助成事業がございまして、たくさんチラシを今回入れておりますので、後ほどお目通しいただけたらと思います。この秋の協働事業イベントということで、しんじゅくアートプロジェクトさんもこの間、大久保まつりのほうで実際にイベントをやっていただきました。こちらに区民委員の野口委員のほうから、協働事業イベント参加ということで写真つきでコメントを書いていたのが今ございますので、これは本日、委員の皆様にご覧いたします。参考にさせていただきたく、どうぞ

よろしくお願いいたします。以上、資料の確認を終わります。

久塚会長 イベント参加レポートも参考にしてくださいということです。では、団体をお呼びしましょうか。

事務局 はい。

(しんじゅくアートプロジェクト・多文化共生推進課・子ども総合センター担当職員着席)

久塚会長 では、今日の進め方をお願いします。

事務局 では、初めに進め方でございますけれども、事業の概要と実施状況につきまして提案団体様、しんじゅくアートプロジェクト様のほうから5分程度でご説明のほうをお願いしたいと思います。それで、何か補足等がございましたら事業課さんのほうでお願いしたいと思います。その後、30分間、それぞれ委員から事業課さん及び提案団体さんに対して質問がございます。

その後、委員さんと団体さんと事業課さんの三者で意見交換を25分間やっていただきます。この後、街角スポット事業になりますけれども、2事業続けた後に10分間休憩をとりまして、委員だけの採点に向けての話し合いということになります。本日の予定は以上ようになっておりますのでよろしくお願いいたします。

今のことで何かご質問がございますか。

久塚会長 進め方はそのように例年やっておりますのでよろしくお願いいたします。お忙しいときにおいでいただき、ありがとうございます。

では、時間になりましたので、それぞれの委員もよろしくお願いいたします。事務局からあったように事業の概要及び実施状況について、提案団体のほうから5分ぐらいで説明をよろしくお願いいたします。

事業者 おはようございます。しんじゅくアートプロジェクトの海老原と申します。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

そうしましたら早速事業の概要説明についてさせていただきます。まず事業の目的が、新宿区に在住する外国にルーツを持つ人々の多様性を文化資源ととらえて、一歩進んだ新しい多文化共生のロールモデルを実現する。また、その多文化の背景を持つ子供たちやその保護者と地域の日本人住民との参加による共同生活の場を提供することによって、多文化共生地域社会をともにつくっていくということです。

実施概要の内容としましては、まず特に三つありまして、一番目が芸術ワークショップの実施、外国ルーツの子供たちやその保護者、また地域の日本人とが共同制作を行う機会をワークショップを通じて提供しまして、住民参加の取り組みをつくっていきます。

2番目が公共スペースを活用した展示活動・創作スペースの設置による子供たちの居場所づくりです。

3番目、最後が外国、海外の芸術家ですとか地域住民との国際的なまちづくりや人事育成。以上のことを通じて、みずからが母国と日本とのかけ橋として認識し、国際的な人材に貢献するということを設定しています。

今年度2年目実施に伴いまして活動指標として二つ設定しました。一つが芸術ワークショップの実施回数を17回、また地域との連携、地域での発表として5カ所の発表を指標として設定しています。また、昨年度その具体的な成果目標をということで、成果目標としまして芸術ワークショップの参加者を340名、新宿区内における活動の定着化、また地域活動、子供ですとかアートプロジェクトとかそういった地域活動を行うコミュニティとのネットワーク形成というものを設けております。

そうしまして、またことしは2年目ということもありまして、学校への授業協力ですとか、あとは教育機関を巻き込んだ事業運営を行い、またさまざまなNPOや地域団体との交流を図り、活動を区内全域に広げていくことと、新規参加者数の増を図ることとしています。

お手元に実績の資料として写真のものが用意してあるかと思うのですが、横長の資料のものです。こちらに事業実績、こちら作成したときは9月26日時点となっておりますが、延べ参加者数が9月26日時点で176人、子供158人、大人が18人、芸術ワークショップの実施回数が10回となっております。この後、10月に大久保まつりの参加と、あとダンスワークショップを1回開催しましたので、参加者人数としましてはこれにプラス60名強が追加される形になります。

今年度地域での発表及び展示としまして、まず大久保図書館での写真作品の展示、また区内にさらに活動を広げるために在日フランス人協会とご協力いただきまして、毎年新しく来日されたフランス人向けの方のオリエンテーションがあるのですが、そこで活動の紹介と説明をいたしました。また、10月14日には大久保まつりに参加しまして、こちらは全体の参加者が50名、大人から子供、国籍はフィリピン、韓国、中国、ミャンマー、ネパールなどさまざまな国籍の方と日本人住民とが参加して開催しました。

6番目の写真が3枚つづりになっているところに各ワークショップの様子を参考に載せたのですけれども、ことしは写真のワークショップはまずまちに出てその地域、なかなか外国にルーツのある子供たちが地域のことを知る機会がないということで、まちの中の笑顔や色、好きなものをテーマにそれぞれカメラを持って撮影しました。その後、それぞれの写真をお互い見ながらその地域の中で発見したこと。例えば今まで知らなかったようなお店ですとか施設などですとか、そういったことについて話し合いながらお互いに作品展示をしました。その後、ワークショップの後にも大久保図書館での展示に向けて、みんなで集まって展示の準備をしたりですとか、そういった活動も行いました。

2番目がダンスワークショップの様子です。ことしは子ども総合センターさんのほうで月1回、定期的な開催をすることで、より多くの子供たちですとか保護者の方に周知をするべく毎月の第1木曜日に主に小学生向きに実施をしました。それと並行しまして中学生、高校生向けのダンスワークショップを大久保地域センターを利用して実施いたしました。

2番目の追加資料のほうが、ちょうど10月14日に開催した大久保まつりに出演した様子なのですけれども、なかなかその今回日本人住民の大人の方の参加も多かったのですが、外国にルーツのある子供たちという名前はよく聞くのですが、直接こう触れ合ったり話をしたりするような機会がないですとか、あと保護者の方も一緒に今回、外国人の保護者の方も来ていたので、そういった方々との交流をしながら一緒にまつりに参加することができて大変いろいろと勉強にもなりましたし、何かこれまでちょっとこう距離を置いていたところがすごくグッと近く感じたというコメントをいただきました。

また、下三つが地域活動での地域の展示の様子です。大久保図書館の作品展示、また本塩町児童館のほうなのですけれども、こちらは昨年度ダンスワークショップを実施しまして、ことしはその協働事業の枠組みではふだんの練習ではなくて児童館自身の活動としてダンスの練習を実施していただきました。なので本塩町に関しましては来年度も引き続き事業を、ダンスのワークショップをしていきたいという声をいただいております、こちらは活動の計画などつながりました。

あと、丸の内朝大学の共催とあるのですけれども、今年度は特に新宿区内の地域のコミュニティさんもそうなのですが、それ以外のさまざまな団体との連携もありまして、今、丸の内朝大学という社会人向けのコミュニティ大学があるのですが、そちらのほうで国内のアジア発見講座というものがございます。そこから依頼を受けまして、一緒に大久保の

まち歩きを行いました。その際にはこれまでワークショップに参加した主に高校生、義務教育以降の年齢の方、高校ですとか大学の子も一緒になって協働しながらまち歩きを行いました。

最後に国際的な人材育成と書いてあります、追加資料の最後のページなのですが、今年度は先ほどの丸の内朝大学もそうなのですが、海外からの視察が特に多く受けておりまして、その一つに国際交流基金という海外と日本との文化芸術交流活動を行っている団体さんがあるのですが、そこから招聘された多文化共生の専門家2名が視察に参りまして、ユースメンバーの高校生以上の若者のメンバーと交流しました。

また、ことし特にその一つ成果としてとらえているのですが、高校生以上の10代後半から20代前半の若者が、芸術ワークショップの参加をきっかけに若者、ユースのグループを結成しました。大体週1回定期的に集まっておりまして、その私たちが開催している芸術ワークショップの企画・運営の補助ですとか、あとは自分たちの自主的な制作活動も行っております。特に写真のほうに熱心な子供たちが多く参加しておりまして、11月の半ばに自分たちで自主企画の写真の展覧会をしたいということで、テーマを「自分たちの住むまち、ホーム」のというテーマに設定して、そういったところで自主的な活動にもつながっております。

今回双方、一方的に日本人側から例えば何か日本語を教えるですとか、そういった片方の一方通行ではなくて、双方向の多文化共生を実現するという点において、このユース活動のメンバー、大体20人ぐらいなのですが、それは日本人の子もおりますし、外国にルーツのある子もいます。そういった形ではその今回のユースの活動というものが、一つの双方向の多文化共生のモデルのスタートになったのではないかなと思います。

以上です。

久塚会長 事業課のほうから補足の部分があったりとか。

事業課 特にはないです。

久塚会長 では、質疑の中で何かありましたらご発言ください。

事業課 はい。

久塚会長 では、各委員、それぞれ少し時間が延びても構いませんので質問がありましたら自由にご発言ください。

では、伊藤さん。

伊藤委員 伊藤ですけれども、ちょっと質問させていただきます。まずは点検シートの

ほうから、このQの5番、クエスチョンの5番。事業課さんも団体さんもなのですが3という形で、「事業目的を相互に確認し明確にして、計画づくりを進めましたか」というところがほかの項目に比べると目立つのですけれども、3というのが。ここでちょっと質問したいのですが、この「事業目的を相互に確認し」、確認したのですかということが一つ。

それと、その確認したものを計画づくりに反映されたのか。二つのここに問題が出てくると思うのですが、一つは確認されたのか。それと、計画づくりを進めましたか、進めませんでしたかということ、そこ二つを両方で答えていただきたいと思います。まず1点です。

それともう一つ、その今度はクエスチョンの8、計画測定、それとの費用と効果ということを書いているのですが、その測定は難しい面があると思いますが、自分たちが効果を相互に検討し確認したときに何が難しかったのか、その難しかったことがどうしても計画に反映できない。こうすれば反映、計画にできるのだけれどもということが、そこら辺の苦勞をちょっと知りたいです。

もう一つは活動、全体的な活動が今お話しされて、サポーターさんがかなりできているのですが、そのサポーターさんが今後ずっと永続的にと言うとおかしいけれどもかかわってくれるような体制、その組織というか体制になっているのか。つくるような動きがあるのか。そうすると、今のいる子供たちも安心して、今度は自分たちが成人したときにその中に入っていると思うのだ。それが必要だと思うのです、永続性のためには。そこの点ともう一つあとすみません、あと一つですが、地域的に去年の例挙の中で地域的に偏りが活動に見られたと、ことしはいろんなところでこう写真を見るとやっているのですが、その中で何が出てきた、何がわかってきたのか、子供たちの。団体さんもそうですけれども、わかってきたのか。

それと、こう端で見ていると直感的には中国、韓国、ミャンマーですとか一方通行、一対一、それと日本人との一対一の関係でとらえられやすいのですが、やっぱりこれ織りなされているのです。その子供たち、アジアという組織内、くくりがいいのか、世界というくくりがいいのか、そういう面で自分たちは日本との関係、それと韓国人であればミャンマーとの関係だ、中国との関係だというのをそこで理解し、本当にアジア人としてインターネットのような世界的、地球的な人間としてどんなふうにいけばいいのかという、そこまでいっているのかどうか。そこら、それといていなければ、今後そこも必要だからこういうふうを考えているよだとかと言ってください。

ちょっと質問四つほどですが、端的でいいです。

久塚会長 それだけ言っていて端的というのはおかしいよ。もう全部総論みたいな形でかわるような話なので。それ、答えたらほかの委員は質問がないのではないかなと思うぐらい。

順番は構いませんので、やっぱり一つずつやったほうがよかった。

伊藤委員 最初のQの5とQの8で。

久塚会長 ああ、それは具体的ですね。

事業課 では、すみません、事業課からお答えさせていただきます。

久塚会長 はい、お願いします。

事業課 まず一つ目のご質問のQの5番の「事業目的を相互に確認し明確にして、計画づくりを進めましたか」というこれに関して、確認したかというところと、それを計画に反映したかというご質問に関してなのですけれども、そのために毎月必ず月1回定例の打ち合わせを設けておまして、当初の事業計画シートに関しては何度も密に打ち合わせをしました。ことしこれに関して評価を3としたところに関しては、やはり先ほどちょっとお話に出てきましたやっぱり費用対効果ですとか、そういったところがなかなかやっぱり明確にクリアにできなかったということと、2年目ということで昨年ご指摘いただいた内容ですとか課題に上がったようなところを重点的に検討し合った結果、一応計画には反映させることはできたのですけれども、なかなか昨年いただいたご指摘全部をこの中に盛り込むことができなかったということで一応3という評価にさせていただきました。

久塚会長 あと覚えています、質問を覚えていますか。一々また。

事業課 二つ目がQの8ですね。

事業者 費用対効果。

伊藤委員 効果をどんな測定すればいいか。

久塚会長 そうそう。

伊藤委員 効果を何で測定すれば妥当性が。

事業課 そうですね、では二つ目のQ8です。今効果をどう測定するかということで、昨年もやはりここがこの中間評価の場でもかなりご指摘いただいたところで、事業課としても団体としてもかなり頭を悩ませたところなのですけれども、やはりその人材育成というところをメインに置いている関係で、例えばワークショップを1回やって、そのワークショップに幾らかかったか、子供にどういう影響があったかというのは、やっぱりそのた

だ1回のものでは考え切れないと。やっぱり長い視点で見なければならぬということ、例えば参加者が1人来て、それにお金が1人当たり幾らかかったから効果がよかったのか、悪いのかというのが、これはもうその費用対効果という考えでなくて、全く別の次元で考えるしかないのであるということ、なかなかここに関しては評価がつけづらいというところで3という評価結果にさせていただきました。

伊藤委員 それですと、簡単に考えると単発的に最初来てくれた、ああ、よかった、あけてアンケートとってよかった。その人がこうリピートとして何回も何回も来る、ないしは核となって参加してくれるというのでも一つのとらえ方としてはできるのだ。

事業者 そうですね。ワークショップのことしの、先ほどサポーターと言ったときに、今そのユース、義務教育以降です。高校生とか、特に大学生相当年齢の子がサポーターとしてかかわってくれているのですけれども、その中の1人の子が5年前、この協働事業自身が実際に始まる前です。まだNPO助成をいただいていたときに参加した、そのとき高校生だった中国の女の子なのですが、その子がまた大学生になって参加してくれたのです。それで、参加する中でぜひ自分のこれまでの、来日してからのいろいろ自分も大変だったし、また同じような子供がその下にいるのだったら、自分自身はこのワークショップで参加したことでいろいろと友達もできたり、また新しい世界も知れたから、そういった機会を今度自分たちがつくっていきたいというふうに言ってくれました。やっぱりそこを。

伊藤委員 そういうところを、ここを効果のところに入れればいいのではないのかという話なのだ。

事業者 そういったところに単年度でこの事業が長くても2年です、見ているものから、例えばその長期的なそれこそ5年とか10年となったときに、伊藤委員がおっしゃるとおりその長期的なところで見たときのスケールと、その中で今1年、2年をどう見るかというところがあると思います。

なので、先ほどQの5のところ、なぜ3だったかと言いますと、そういったところでの具体的ところが本当にずっとお互い話し合いながら、悩みながら進めていたというのと、ただ一方としてこちらのほうの自己点検シートにあるのですが、年度の初めには例えば具体的に三つ課題として共有しました。一つが外国ルーツの子供とその保護者とが地域との交流の機会をもっとつくっていくこと。特に保護者の方がどういったところで子供を遊ばせていいのか、どういったところで子育てのサポートが受けられるのかという情報があまりないので、そういったところがまず一つの課題であると。



あとは2番目が久保地域以外での多文化共生の推進です。三つ目がまちづくり、地域ネットワークの中にいかにそういったその外国ルーツの子供たち、保護者を組み込んでいくか、そういった課題の面での共有はできておりました、事業の計画の中にも組み込んでいて、今それを実施をして評価をしたときに、まだこれという、私たち自身が評価方法を作成、一つつくりだしていただけていないのでということなんです。

すみません、これで1点目と2点目の質問は。

事業者 ということ、むしろどういう評価方法をしたらこういう目に見えない活動がその表現できるかということ、むしろご指導いただければなというふうに思うところがあって、先ほど伊藤委員のほうから今述べたこと、ああ、そういうことを言えばいいのだよというふうにおっしゃってくださったので、やっぱりどういうことを伝えていけば効果を表に出していけるかというところはこちらも悩んでいるところがありますので、やっぱり委員さんのほうからも、いや、こういう方法をとったらすごく見えやすいのだよというアドバイスをいただければありがたいかなというので、昨年からずっとその評価の件については悩んでいるところは事実です。

事業者 3番目はサポーター。

伊藤委員 うん、サポーターの今後というか。

事業者 サポーターとおっしゃった。

事業者 これまで手伝ってくださったボランティアの方ですとか、あとユースの話も。

伊藤委員 うん、今やっている方たちで。

事業者 はい、今義務教育終了後の高校生、大学生相当年齢というふうには呼ばせていただいたのは、高校に行っている子もいますし、大学に行っている子もいるのですが、ほとんどが高校は卒業したのですが、大学に経済的な事情ですとか学力的な事情から進学できずにアルバイトをしながらという子がユースのサポーターとして今多くかかわっています。

それで、今は大体20名ぐらいメンバーがいるのですが、どちらかというとイメージとしてはちょっとその大学生サークルのグループに近いところがあるのですが、それぞれ部活のような形で、例えば写真・映像部、ダンス部、国際交流部というような形で、今三つ設けています。それを統括するリーダー役割をしている子がおりまして、有機的な形で交流はしているのですが、その中で自分たちでもうちょっと組織立って動いていきたいという動きが出ているので、今まではどちらかというとワークショップをやるときにア

アーティストさんと呼んで、そのアーティストさん、芸術家の方にワークショップをしてもらうという活動をとっていたのですが、ちょっとこれからの形としては、そういったワークショップをしてくれるアーティストさんの方に、そういったサポーターとかボランティアを、ある意味ボランティア養成講座のようにちょっとトレーニングしてもらって、今度はそのトレーニングされたサポーターと芸術家の方と一緒にワークショップを行っていくというような形にしていきたいなというふうに思っております。

それで、事業自体は、協働事業自体は今年度で終わるのですが、それ以降もこの活動自体はしんじゅくアートプロジェクトの団体として引き続き続けていこうと思っています。

伊藤委員 今言われているようにやはりある年齢になったらおしまい、年齢で終わってしまうというのはもったいないわけだ。それをこう広げていく活動が必要なわけで、学校だ、高校だとか大学というところに行っているからその間では話せるのだけれども、そこを出てしまったときにどんなふうに組織立てていくか。どのように、今言ったようにいろんな興味はみんな違うのだけれどもやっていくか。その中で一人一人、1人でもいい、2人でもいい、核になる人間、ずっと続けていけるような人間を1人つくっておかないといけないのだ。そこがまずひとつできるか、できないか。

それと今言ったようにそれを有機的に結びつけて総合的なものとしてこう運営していく、この展示会でも何でもいいけれども、単品的には写真の展示会、何の展示会ではなくて、もっとそこにお母さんたちが来て、各国のお菓子を出してみるとか、そういうふうにいるんなら考えていかないと理解されるのは難しい。

久塚会長 後で意見交換のときに、まだ質問が残っていますよね。

事業者 はい。

伊藤委員 あと一つ。

久塚会長 それを、もう頭から消えてしまった？

伊藤委員 アジアが、要するにインターナショナル的に。

事業者 地域の偏りから。

事業課 では、事業課から。アジアとかその地球規模で考えたとき、日本対その今、韓国の方、中国の方、一対一ではなくて全体をひっくるめた形、相互の中の。

伊藤委員 活動ができていいのか。

事業課 キーワードになってくることなのでは、今まだ新宿区で多文化共生施

策を含め、団体さんのこの事業内容を含め、そこまで大きな視野でとらえることはできてはいませんが、着実に地域の中で孤立している子供たち、自尊心を持ってない子供たちが地域で安定した生活を送るためにこういった活動の場、居場所として提供するところからまず第一歩始めていこうというところですので、今まだそこまで大きな規模ではとらえられない段階ではないです。これは区と、区の多文化共生施策としてもそういったまだレベルでするので、そこだけちょっとご理解いただきたいなというところです。

事業者 そうですね、それでも本当に今始まったばかりのところとして、今芽として一つある意味植えているのが、先ほどヨーロッパから多文化共生の専門家の方が視察に来られてという話をしたのですけれども、イタリアでこういった同じように多文化共生の活動をされている団体さんが、やはりユースサポーターを使っていろいろな多文化共生の試みをしているのです。その話をこちらのユースサポーターにいろいろと情報交換したのですが、そしたらそのときこちら側の参加者は中国、ミャンマー、先ほど言ったようなアジアの国と日本人の子がいたのですけれども、ヨーロッパでそういった活動を自分たちと同じような年代の子が、自分たちと同じようなバックグラウンドの子たちがやっているというのを聞いて、それですごく刺激を受けたというところで、自分たちが何かできないか。自分たちが持っている例えばアジアのことだったり、自分の国をもっと知りたいと思うようになったりですとか、あとは自分たちをつなぐものは何なんだろうとか、そういったその話し合いになったりですとか、今は本当にアジア人として自分たちは何なんだろう。

もしくは今日本にいる在住外国人の子もいますし、またその友達になっている日本人の子もいますけれども、そういったみんながこうつながっていけるようなものは何なんだろうというところが本当に今まさしく始まっているところで、先ほど今後そのサポーターをどうつくっていくかというところともかぶっていくと思うのですが、そこは引き続きイタリアのほうの団体はすごく関心を持ってくださって、国際交流をしていきたいというふうにおっしゃってくださっているのです、大体2年間ぐらいの計画でまず情報交換などもしながら、行く行くは人物交流なども予算の利用ができればやっていきたいと思っています。

あと、最後に地域の偏りから何がわかってきたか。今回子供たちと接する中で何が出てきたかということなのですけれども、一つ特にことしすごく顕著に感じましたのが、義務教育卒業後の年齢の子供たちの参加がとてふえました。それがこれまでも異年齢の、それこそ下は小学生から上は大学生ぐらいまで参加していたのですが、高校を卒業したけれども行き場がないですとか、あとは逆にもう中学を卒業、高校を卒業してしまってから

日本に来て、親が働いているので日本に来てはみたけれども、バイトはしているが情報がなくて、友達もつくりたいけれどもできないですとか、日本の情報が全然入らないというような参加者がふえていまして、そういった子もユースサポーターとしてかかわってくれています。

そういったそのいわゆる義務教育までは学校があるので、学校が一つその日本社会とのつながりの場になると思うのですけれども、そこから漏れてしまった子たちにとっては、日本社会とこうつながる場というのがなかなかないので、そういう意味では今回のワークショップであったり、それに引き続きのユースのサポーターグループの活動がすごく重要な日本社会との接点になっているのだなということが発見できました。

これで全部質問は。

事業者 そうですね。

久塚会長 時間がヒアリングと意見交換ともまじった形に少しずつ行きつつあるので、最初にちょっと質問がありましたらそれで言っていただいて、それでご意見を委員の方から、あるいは団体と交換するというふうにしたいのですが、どなたかありますか。では、手短で。

宇都木委員 いいですか、宇都木です。今の伊藤さんの質問で皆さんのお話を聞いていてもそうなのですが、どうもこの事業の持っている意味が、ちょっと皆さんの話だとあまり技術的な、技術的というか、本当に何をねらっているのかというところはちょっと薄れてしまっているのではないかと思うのです。これはかなり中・長期的な計画がもちろんあって、行政は行政側に中・長期的な計画があって、それからNPO、団体側は団体側の長い間の活動の経歴を生かして、あるこの時期にはこのぐらいのことをやりたいという、そういうことも両方あって、そういう意見交換の中で協働事業ができ上がっていると思うのです。そこがちょっと見えないのです。

どこが見えないかというと、団体側のあれで言うと、協働事業の実施のところの下にその補足説明がありますけれども、この中ほどに「より多くの新宿区民に対し事業の理解を高めることができた」とこう書いてあるのです。いわば目的がもう半ば達成されたかごとき表現になっているわけですが、前からこう続けて読むと。

それはどういうことかということ、大久保地域以外でなくてほかにもグッと広げて全新宿的なこういう活動をするのが今度のこの協働事業の大きな目的の一つになるので、それは昨年指摘、そういうことです。その結果はこれ、何というのですか、本塩町というので

すか、それでいいの、読み方は。

事業者 はい。

宇都木委員 児童館がダンスワークショップを児童館事業として採用するなど区内の活動として定着してきたということは、ここで言う、これだけ見ると1カ所しかないことになります。

そうすると、この大きな目的である多文化共生のロールモデルを実現して、新宿区内に共生社会をつくっていくのだというところのどの辺までこれが行っているのかというのはわからないと、これ、後で説明がつかないと思うのです、最後のところの。そのところを少し説明してもらえませんか。それが一つです。

それから、これも団体さんもそうなのですが、これは協働事業実施の最後のほうです。一番最後、現段階で協働に取り組んだことによる効果についてというの、それでこの補足説明がいっぱいあるのですが、この中ごろに「多文化共生のロールモデルを実現するという事業の目的が達成できた」とこう書いてあるのです。より多くの区民に対して事業展開ができた、行ったのでしょ。

地域調整課長 4ページです。

宇都木委員 4ページ、4ページです。これ、団体の報告です。今の話を、伊藤さんとの話を聞いているとこれで表現でいいのかなと思うのです。そこまで行っていないのではないの、実際は。

だから、何をもちょうこういうことになったのかというのをもう少し説明しないと、これと言うと言葉は悪いけれども、書いていることとやっていることの違いが大き過ぎる。だから、そこを目的達成できたと言うなら、どこまでの目的達成できたということにならないとぐあいが悪いので、これは少しこれからの議論してもらったらと思うのです。

それから、もう一つ、これ意見で申しわけないけれども、意見か質問。答えてもらえればそれでいいのですが、例えば今の費用対効果の問題。皆さんが評価する基準、判断基準というのをもちょう皆さん自身を持たないとちょっと説明がつかないです、今の伊藤さんの質問に答えているのを聞いていても。

だから、費用対効果をどのように評価するかというのは、こういう判断基準に基づけばこうですというようなやっぱりちゃんと当初計画と実際の実行段階のところと比べてやっぱり判断基準を示してもらわないと、これは事業ですからかなりシビアなのです、実際は。

何がシビアかというとお金を使っているわけで、そのお金がどれだけ有効に活用された

かということ、例えば新宿区で言えば議会のそれが最大の問題になるのです、議会では。それに説明がつかないと、この事業のよしあしというか、成果が判断できないということになるので、そこはやっぱりそういう基準を少し持ってもらったらどうでしょうか。というのが私の大変総論的な。

久塚会長 三つ目の、費用対効果のことはご回答ならなくてもいいと思います。言ったら怒ってしまうかもしれないけれども、先ほど事業課のほうからも説明がありましたし、その多分費用対効果でリピーターだとか核になる人が出るというようなことを先取りで説明されたら、伊藤委員は多分それは複数年度で同じ人が何回も出ているのではないのみたいな逆の質問に変わってくるわけ。

だから、延べ人数と言いながら、5人の人が5回来て25人と数えているのではないのみたいな、それをリピーターと言うのではないのですかと切り返さないとだめなのです、そういうときは逆に。

私たちの費用対効果というのはそういう考え方なのですよというふうに、最初計画のところはこの効果というのはどういうふうにして測定する事業であるということまで頭に入れて、あなたたちのNPOの流れにかかるその実施目標というのがありますよね、この事業だけではなくて、私たちはこういうことをしようと将来的にも考えている。その中でたまたまこれが費用がついて、事業課と一緒に何かをやるという一つのパートなわけです。

だから、これについて、この事業との関係で言えばこういう評価なのだけれども、私たちは全体的にさっきどこまで広げますかということもあったのですけれども、そういうことまで念頭に置いている中で、自分たちは今回のことをこういうふうに位置づけていると。大きな絵をかく、大きな家を建てるとすれば、今回は設計図ですとか、くぎを選ぶ段階ですとか、柱の木を選ぶ段階ですと。だから、柱はこういうところからきちんと選びましたと、まだ家は建てていませんけれども。

では、その変わらぬところは、ほかの例えば区だとかイタリアの団体と一緒にやるのは体選びですとか、そういう形でやっていかないと、これ何年かかっても同じことをぐるぐるぐるぐる回ってくることになっていくと思うのです。

だから、5年後、10年後に次の世代の人たちが同じような委員をやっていて、質問して、あなたたちの次の世代が来て、またお金がついたというときに質問して同じ答えが出てきたというのは、これはもうどうしようもない状態なのです。イタリアの団体はどんな

りましたと言ったら、そんなのありましたかねという話になったら今度はこれはアウトになる。やろうねと言って、そこで質問なのですけども、イタリアの団体はこちらに来たときの費用はどこから出したのですか。

事業者 それは国際交流基金さんという団体が招聘で。

久塚会長 が出す費。

事業者 はい。

久塚会長 そうですよ。あなたたちはそういうお金をとってイタリアに行こうということは考えませんか。

事業者 そう考えています。

久塚会長 それにチャレンジしてどうでしたか。

事業者 まだこれからの段階なので。

久塚会長 ああ、来てくださったので。

事業者 そうです、視察として来てくださった中で。

久塚会長 今までは自分たちのこういうのをヨーロッパだとか中国だとかアメリカに行ってみようということは考えていなかった？多文化共生というのはあそこだけで考えていた？自分たちが発信していこうと、世界に。

事業者 そもそも発想としてアメリカのニューヨークでこのようなことがあって、私たちやはり子供たちにずっとかかわっている中で、やはりいろんな潜在能力がある。

久塚会長 あります。

事業者 それで、それとやはり新宿において、なかなか子供たちが自己肯定感を持ってないという現実を子供を観察している中で感じとれて、その中でやっぱりニューヨークでこのような事業をしているということをいろいろ調べた結果あったので、やはりそんなこともできるのかなということで、いろいろワークショップを2009年から始めたというのが始まりで。

久塚会長 うん、そうですよね。

事業者 その結果、やはりこれには効果があるということが認識できて、協働事業という形で提案させていただいた。その中でちょっといろんな大学の先生とかからも情報をいただいたりとかしている中で、そのヨーロッパで同じようなことをしているという情報も持っておりまして、その中で今回国際交流基金がイタリアからとイギリスのほうから専門家をお呼びしたと。まさしく私たちと考えていることが同じ。でも、もっと進んでいると

いうふうなことで、私たちの居場所になっているところを視察して下さったと。その中でユースグループも参加して意見交換をした。それが7月のことだったものですから、その中でユースの子供たちもつくったビデオを要するにコンクールに、世界的なレベルのコンクールに出してみようかとかいろいろなアドバイスもいただいてやると。それで、その結果私たちの。

久塚会長 それが物すごく大きな効果につながっていくわけです。

事業者 はい、そうです。

久塚会長 その子供たちがそう思ったり、それからイタリアからわざわざ来てくださった。単年度一定の金額がついて何人参加したというのも効果かもしれないけれども、そういう質的な意味でのそういうことが起こっているということを言葉に直したり言語化したり、システムをつくったりということを積み重ねていくと、効果というのがいわゆるお役所で電卓たたいて、たったこれだけしか来ていないのかということではこういうことははかれないでしょうと、とても大事なところをもう経験されているわけです。それを書く練習をしないといけない。

事業者 それで、去年のときはかなり人数のことを言われたものですから。

久塚会長 いや、だから。

事業者 はい、それで。

久塚会長 そっちから言うところ言うし。

事業者 そう、はい。

久塚会長 そういうふうな人ばかり集まっているわけです。

事業者 はい、そうですね。

久塚会長 うん、だから両方からきちっと説明できないと。そういう団体に成長していかないと。

事業者 ありがとうございます。

久塚会長 やっぱり宇都木さんもおっしゃったけれども、私たちもその委員としていろんな団体や新宿区の部署が気持ちの中で少し変わって行ってほしいなとか、こうなってほしいなというふうに思っていますのでいろんな仕掛けをするわけです。で、どう変わりつつあるかな、結構頑固だったけれども変化してきたよねとか、いや、私たちとやっぱり考え方が違うから違うほうに独自に歩んでいるよねと、いろんな評価があると思うのです。

最終的には点数はつきますけれども、点数は客観的な点数、点数でしかないのです。それは低い、高いほうが多分いいだろうとは思いますが、物すごく激しい言葉で言うと、自分たちの



評価基準から言うと5になっているけれども、私たちが見たら3とか4かもしれないということとはわんさかあると思うのです。

そこで別れ別れになるのではなくて、こういうお互いに忙しい中こう30分、1時間使ってやるということはどうして3なのだろう。逆に言うと、あなたたちは自分で3つけたけれども、本当は5だと思うのですよねというような気持ちもあるかもしれない。そこを積み重ねていかないと、例えば次の年、あるいは今度外れた後の次の展開というのをこうずっと見ているときに、ああ、ここにいてよかったとか、このまちはやっぱり多文化共生のまちだよねというようなことに地域が変わっていかないような気がするのです。

それを私たちは仕事として、委員についているのでそういうことを言う役割なのです。私もそちらに座ったら違うことを多分言っていると思うのです。だから、そこを自分たちの方法とか自分たちの価値、判断基準のスケールとかをしっかりと持つことが多分大事だと思うのです。それは委員はなかなかわかってくれないということもあるかもしれないけれども、わかってくれないという部分はあるのですが、やっぱりどこかで忙しかったり、人数が足りないというようなことなのでしょうが、強さとか独自性、独自の自己流の独自性のしっかりした判断基準みたいなのが弱いというよりまだ今の社会ではつくりにくいのだろうなというふうに思います。

どうしても人数だとか回数だとかで言われてしまうと、今度はそれでしゃべってしまって、今度は逆の質問が出てくると、去年だってそう言われたものみたいな話になってしまうので。

事業者 ちょっといいですか。私、ちょっとほかの団体で1度協働事業を出させていただいて、今回2度目なのですけれども、ちょっと話が外れるのかもしれないのですが、この評価シートはこの5段階評価自体がちょっと違うかなとすごく思っています。

久塚会長 ああ、どうぞ、どうぞ、それも大事な。

事業者 はい、前のときも話させていただいたのですけれども、ましてや去年のこのアートプロジェクトのときに事業課と団体とではちょっと離れた評価、かなり離れてかなり突っ込まれた気がするのですが、やはりおっしゃったように私たちは自信を持ってやってきて5だと。

久塚会長 そう、そう、そう。

事業者 でも、私たちはそのところを評価していたけれども、まだ事業が終わっていないから、2年間のところの3分の1のところだから、まだ達成できていないから3をつけたよみたいな、その事業課とこちらサイドでもちょっと考え方が違ったということと、私はやはりこの事業評価するのに学校の評価のように5段階でつけるということ自体がすごくやる側としては。

久塚会長 とてもいい意見です。

事業者 不満ということがありまして。

久塚会長 では、どういう評価がいいのですか。

事業者 だから、そのところを最初、一番最初のやったときもこの5段階評価を突きつけられて、でもやっている事業の団体としては、やっぱり精いっぱいかなり頑張っているというところで、本当のところを言ったら全部5をつけたいというのが本音です。

ただ、5をつけると、いや、それは違うだろうという言われ方をして、ここで評価されて、いろんな意見も言われて費用対効果、だから。

久塚会長 うん、そのときに、よろしいですか。事業を実施するときの評価と私たち、こういうことをやりますと宣言して事業をとったときは明らかに違いますよね。

事業者 そうですね。

久塚会長 こういうことをやりますというふうに私たち見えたし、そういうプレゼンテーションだったような気がするわけです。だから、あれっ、あれだけ言ったのは一体何だったのということがどういう評価書になったら書けそうですか。私たちが実はできそうにないけれども、一生懸命やりますとしか言いませんでしたというような話になる。

事業者 ただ、ゼロからの出発という言葉があります。それで、ゼロから、では新宿区全域が100%みんなが、おお、わかった、わかったと言うのもそれを5とする。自分たちはゼロから立ち上げてやって、2009年からやったとしても、やっぱりこういう大きな規模で大きな金額を使って初めてやるということになったときに、過去の蓄積の中で次は確かにあるのですけれども、この事業としてはゼロからの出発というときに、私たちは気持ちとしてはもう全域、新宿区全体の人たちが協働、多文化共生を理解して、多様性をみんなが謳歌してくれるというのはねらっているのだけれども。

久塚会長 そんなのだったらもう協働事業は要らない。

事業者 うん、そう。だけど。

久塚会長 だれでもできることに。

事業者 そこに対して一歩でも二歩でも近づけるということ、あるいは行政のほうが。

久塚会長 そうそう、その小学校だとか中学校だとかの通信簿もそうだと思うのだけれども、一歩でも二歩でも近づけるという子供の思いみたいなのをどう引き出すのかということはとても難しいことだと思うのです。

事業者 はい。

久塚会長 それで、確かに小学校の児童さんから見たらそうだと思うのだけれども、しんじゅくアートプロジェクトさんは小学生ではないわけでしょう。ゼロからと言うが、ゼロではないのです。ある程度人生経験してきて、いろんなことをわかっていて、そしてワープロたたいて計画書をつくっている。で、アプライしている。それはもうゼロではなくて、こういうことをすればこういうお金がとれるかもしれないということを考えて、確信犯とか言わないけれども、そういう上でやっていて、そうやった限りは、事業自体はゼロなのだが、全体が100だとすると、ことしは2まで進めるということが目標で、それがその次どうなりますという事業計画と団体の運営にするわけです。

だから、私たちは話し合いの中で3みたいなことになっているけれども、全体から見るとたった2だけれどもゼロからなので着実に2だし、翌年度は4に行くというところに向いていますということを論述したり説明ができるし、次は6まで行けると。行ける理由はここがこういうふうになったので、多分ベクトルから言うところ向いているから、こうしたらこちらに行くはずだということを自信を持って表現できるような日常的な活動をやっておられると思うのです。それを書けばいいのではないですか。

どこかに点数をつけるというのは、私たちは確かに点数が離れていることについて意見を言いましたけれども、それは離れていることに対する意見のようですが、協働事業としてやるときに離れているということは一体どういうことなのですかということが一番聞きたい。

協働事業というのは今人間で言うとAさんとBさんという違う物体と一緒に生活するみたいな話ではないですか。そのときにもともと違う考えを持っている人が、違うように進もうとしたことについて話し合いしましたというようなことになっているかどうかというのはやっぱり大きいと思うのです。結果としてまた違うところ、平行線で走っているよねということがあってもこれは仕方がない。あなたたちの次の世代や新宿区の次の職員さんたちが異動した後でやってくれるかもしれません。

だけど、確実にプツンで終わっていませんと、協働ですということの大切さということはお互いに認識している。評価が違つたと、そのことと話し合いをせずと同じところに丸がついたというのは全然違うと思うのです。

だから、評価の結果は3と5に分かれたり、あるいは分裂しているように見えるということは、私たちは確かに離れていることを問題指摘しますけれども、離れていること自体ではなくて、協働事業というふうになったのに何で離れているのかな、どうして離れたのかなということがまず一番知りたいことなので。それはもう離れていることについてはもう仕方がない、結

果としては。

事業者 多分その点については、去年の段階で質問されたときに説明はさせていただいたと思うのですけれども。

久塚会長 うん、だからもうそれはそれで私たちの見る目というのは、事業課が見る目と、団体が見る目と委員としての私たちが見る目というのはまたそれぞれ1個のものでも、ここから見た、ここから見た、ここから見たで形が違います。私たちの評価基準というのはやっぱり協働事業提案制度という目線で見ると、お金を。

事業者 いや、だから多分そういうお考えであれば私たちも納得が、私も納得できるのですが、何か一つのものに集約しなければいけないような、要するにこう言われ方をしてきたように私なんかは受け取ってしまっていた。

久塚会長 では、言い方があまりよくなかったかもしれない。

事業者 と、それとやっぱり先ほど申し上げたように、やっぱり1から5までの評価がつくということに対して。

久塚会長 もうちょっとあれですか、では点数ということのほか記述欄がたくさんあったりしたほうがいい？

事業者 あるとか、もうちょっと漠然と言ったら、例えば3段階ぐらいにするとか、あまりこう1から5までというと、どうしてもそういう教育の中で育ってきてしまった私たちにしてみると、やっぱり学校評価みたいな、すごく評価ということを。

久塚会長 それをうまくいかに向かって仕掛けしていくか。

事業者 ましてや1から5なんていうふうな評価をつけられると、だから。

宇都木委員 学校でなくても同じだよ。

事業者 その評価。

宇都木委員 3にしても10にしても同じですよ、それは。問題は事業の中身で評価するのだから、それがこの5段階で言えばどこに当てはまるかという、3段階にすればどこに当てはまるかというだけの話でしょう。問題は事業がどれだけ進行して、あなたたちが提案してくれた計画どおりつくってくれたものがどこまで進行して、目的が達成できたかというところが重要なことなので、それを比較的その計画のほうに近いところに行っただけならば一番最高が5だから5になるのだろうし、4になるのだろうし、もうちょっと頑張ってもらいたいというのなら3になったりそれはするのだと思うのです。それ、同じだと思うのです、どういうふうにしても。どこかで評価しなければいけないから。

久塚会長 やっぱり第三者評価とかほかの評価を得るといのはなかなか難しいのです。評価をする側も大学に対してこう評価基準を得るところ、協会から。この間も来て、ヒアリングが来ましたが、その中でやっぱり委員になってしまうと、こういう立場からこういう基準によってこう評価する。評価される側はかちんとくことは幾らでもあることはあるのだが、それを評価しないと一定の事柄をベースにしていい社会にしようねと言っている限りは、やっぱり唯我独尊というか、自分のワールドだけでは困るよねということだし、その評価されることをある程度受け入れる気持ちがないと、自分たちで自分たちを評価することは非常に難しいですよ。

事業者 ええ、だからそれは別に評価することを悪いと言っているわけではなくて、当然そういうシステムの中で私たちは応募して事業をしているわけなので、評価することが悪いとか言っている意味では全然ない、そんなことは別に言っている。

久塚会長 ああ、もちろんその評価の方法についての貴重なアドバイスだと思いますので、私たちの中で議論して、例えばNPOの団体に自分たちで自分たちの事柄を点数をつけさせてもいいと思うのです。それで点数つけさせた理由、それも私は大学院生によくやるのですけれども、前期どうだったという、100点と言う子もいるし、60点と言う。その100点と言った理由が大事なので。なぜあなたは自分のたったこれだけしか論文書いていないことが100点だと考えているのかということを実証とか立証してこちらに説得できれば。

事業者 そうですね、はい。

久塚会長 うん、自分のことを20点だと言っているけれども、こんな立派な論文を書いているのに何で20点なのと。だから、自分のことを自分だけの目線ではなくて社会を意識した自分目線で自分を評価できる。もっと言えばアートプロジェクトが事業課やこの委員会や新宿区の予算などの3画素を掛けて自分たちのことをどう見ているかということがないと、自分たちの話だけで自分たちのことを評価してしまうという。

だから、常に評価される対象であるあなたたちの事業を自分目線、子供目線、ワールド目線、新宿区目線というところで常にモニタリングかけておくということがとても大事で、そうしたことがこのような中の自由記述、まだ幅が少ないかもしれないけれども、その中にこの目線から言うところのこういう評価になるが、自分たちの評価基準というのはこういうところにあるのだと。そこから言うところのこういうふうを考えているという補足の部分でいいのではないですか。

私たちも考えていきたいと思っております。

事業者 ありがとうございます。

竹内委員 ちょっといいですか。

久塚会長 はい。

竹内委員 すみません、竹内ですけれども。当初から目的とか費用効果でかなりのいろいろ話題になっているようなのですが、まず活動指標としてアウトプットをちゃんとこの出されることはいいと思うのです。例えば今ワークショップを何回かやりました、展示スペース巡回しました、芸術家の交流をやりましたというところで、何名でどうで計画をされているわけです。

ですから、どれに対してその結果はどうなったのですよというのを、何かこうきょう1枚でも出しておいていただけると非常にわかりやすくよかったかなと思うのです。それに対して例えばそれぞれ200万ですとか100万ですとかお金がかかっているわけですから、それに対してどうだったというのが一つと、それからそういうふうな内容を実施した結果です。アウトカムというか、どんな状態になったかと、生じたその状態を何か出してでもいいのではないか思うのです。

当初からそういう事業をやってどんな状態にしたいのだというのがそちらにあるはずなので、それに対してどんな状態になりましたというようなところを認めていただけるとわかりやすいのではないかなとちょっと思うのですけれども。

それと、先ほどからちょっと目標について、多分アートプロジェクトさんの根本的なところは、要するに疎外感を持っている子供を外へ出して地域とこう手助けをするというのが根本的なところになっているので、そこを軸にして多文化共生につなげようという話になっているので、それだったらそういう疎外感を持っている方々がその地域にどれぐらいいらして、どんなふうになりましたようなところも一つの指標にはなるのかもしれませんが。

あと、この新宿区全体でやると、今広げようという考えがあるのですけれども、外国人がかなり多い地域は区の中でも多分決まっていると思うのです。ですから、そういうところから徐々に攻めていって、いないところでも全体にこうかかわれるみたいな仕組みづくりみたいなものがあるといいのではないかなというようなちょっと感じを持ちましたので。

久塚会長 可能性がすごく大きなプロジェクトなのです。私ども震災ボランティアを含めて学生さんとつき合っていて常日ごろ思うのは、よく早稲田の学生は確かに行ってくれるのだけれども、行ってくれるということと行ったことを言語化することは別なのです。インターンシップに出かけたり、ボランティアに出かけるということでは単位をあげられないが、自分の経験を文章や組織化に活かして具体的なものにするということはとても大事なことだと思うのです。

だから、アートプロジェクト、その今、竹内委員が言われたようなことを、何が結果として生じたのかというときに、それを言葉に直すというのはとても大変なことなのです。その訓練を積まないと同じところをぐるぐる回りそうな気がする。人数だとかそういうことでしかはかれないようなことになるので、やっぱり国際的に交流が始まって、もしヨーロッパに行ったとすれば、どういう効果がありましたかと言ったら、自分の感覚を今度は日本語ではない言葉に置きかえるようなことで説明できないと展開できませんよね。

やっぱりその数字のところはわかりやすい効果のようなのですけれども、それは最低限のことで、数字で言えばこういうことです。レポートで言えばこういうことです。核となる人間をつくるということはこういうことができております。まち自体がこういうふうに変化したと思われれます。思われます理由はこういうことからですということが文章に出てくるような形で表現していくというか、キーボードをたたいていくことが次のステップに多分つながってくると思うのです。せつかくのものがむだにならないようにしてくれればなと思いながらこう聞いていたのですけれども。

事業者 ありがとうございます。今後長期的、中・長期的に見た中で、では今回の事業が何だったか、どうだったかというところなのですからけれども、先ほど可能性というふうにおっしゃってくださったようにユースグループが2年間の一つの大きな成果だったとあって、やはり先ほど委員さんもおっしゃられたとおり新宿区の中で偏りがどうしても住民の中にあります。なので、児童館でワークショップをやろうとしたときに、そもそもその地域に住んでいる外国の住民の方、子供が少ないという地域があるというのは去年から把握しておまして、例えば今そのユースグループの子たちが自分たちでワークショップをやりたい。アーティストさんたちから自分たちはボランティア研修を受けて展開していきたいというような話が出ていたので、そうしたらいろんなルーツを持った子たち、日本人も含めていますので、そういう子たちが児童館に回ってワークショップをしていくことで、多文化共生しているいろんな国の子がユースグループのように一緒になってアートを軸に活動しているけれども、そういった試みがあって一緒にこうやってみんなでアート作業をしていくのだよという。

久塚会長 すごいことだ。

事業者 その種づくり、土台です。先ほどおっしゃっていただいたように家づくり、家を、全体を家ととらえるのであれば土台、柱となるものを一つ今回ユースグループでできたところがあると思います。区内の展開に関して言えば、そこを核に今年度以降も児童館との連携、ネットワーキングができましたので、巡回していきながらつくっていきたいと思っております。

久塚会長 はい、はい、結構です。

事業者 外国との交流につきましては本当に7月に視察にいらして、ぜひいろいろと情報交換をしていこうという、これも土台なのですけれども、全体の計画としては大体5年というふうに考えていて、大きなところを先に説明させていただきますと、新宿区さんも今その区としてそのグローバルな視点で多文化共生どうかというところまではまだできていない。

ただ、そのスタートは着実に始まっていると思うのです、その土台づくりのところ。そういう意味において言えば、私どもの団体は今回の多文化共生というのは、国内の問題のみならずこれはグローバルな課題だと思っております。同じようなやはり問題とか悩んでいること、状況がイタリアにもありますし、イギリスにもありますということが今回初めて7月でわかったので、来年度はまずはお互いがどういう活動をやっているかという情報共有を、幸い今インターネットもありますし、フェイスブックとかそういったこともあるので、そういったソーシャルメディアですとかウェブ上の交流と、あとは写真も作品をお互いこう相互交換して展示をする。

それは去年、ことしもこの協働事業で行いますけれども、その作品の交流と情報の交流というものを大体2年間かけてベースをつくる。その後的人物交流までに発展できればと思っています。なので最終的なところはそういった例えばイタリア、イギリス、韓国にも最近多文化共生ができていますし、そういったところと日本の他ルーツを持つ若者、日本の若者、そういった多文化共生のグループがお互いに交流し合って、世界的なグローバルなユースのネットワークができるぐらいまでに展開できたらいいなとは思っているのですが、それは本当に10カ年、10年計画のところ。

久塚会長 いや、できますよ。

事業者 なので、今は本当に先ほどおっしゃっていただいたようにすごくこの協働事業、ゼロからつくるところでは土台づくりだったと思っています。土台づくりという意味では先ほど総合、双方向の多文化共生を実現するという意味において、そういった双方向の多文化共生を行っているこれからの未来をつくる若者たちのグループをつくることができた。そこが一つ大学のサークルのように第1期生がいて、第2期生がいて、ワークショップを続けていくことで、例えばそのとき中学生だった子たちが高校生になって、大学生になって入って循環していくような、そういったような形で続けていきたいなというふうに、本当にいろんなアドバイスをいただいて。

伊藤委員 それを計画に盛り、計画をつくるのです。今、口で言っているけれども、それを



全部計画につくるの、何年までに何カ国とやる、何年までにここまで言う。新宿区もそうだが、今、大久保だから、先ほど言われたように地域的に偏りがあるから、その大久保を核にしてここ、ここ、ここをこう染めていくという、そういう計画をつくるのだ。それができたか、できないかが、最終的なもの全部に行き渡ったのが5ではないのよ。自分たちが、僕がこの協働事業を長期計画をつくってくださいよと言われていたと思うのだ。そこに照らした活動でいいの。自分たちはことしはここまでやろう、できた。こういうことがわかった。来年これを生かしていく。これが5なのだ。

例えばその全部ができて5ではない。最終的にいったときに、それ以上になるかもわからないし。だから、計画をちゃんとつくって、それを実行することをちゃんとして、先ほど言ったように何をそれではかるか、自分たちが。そこをつくるのが大事なの。だから、計画のすり合わせはそれなのよ。もう本当にはっきり言ってしまおうとできていないような気がする。

久塚会長 だから、いい話し合いというか、お互いにかなりぶつけたと思うのですけれども、私自身は大学生とか大学院生はあまり極端な話ではないが、自分でこういうことをやってみようというふうに考えた方が、自分も含めて1カ月なら1カ月、1年なら1年で何がどれだけできたのかなというところで評価をするということがとても大事な作業になってくる。

ことしの手帳が真っ白け、ほとんど何も書いていないですけれども、いつもゼミ生とか大学院生の、小児科の先生みたいなもので、カルテみたいなものを持っていて、どれだけつづせているのかと。それはこちら目線で100メートルを10秒で走れということを言っているわけではないので、自分は15秒で走れるまで努力しますと言ったことがどこまで近づけたのかなと。近づけてあるというのは結果として16秒になったのではなくて、15秒で走れるようなことができるためには何をしようとしているのかなということが自分でわかっているかどうかということが一番見たいし、見ているところなのです。何人とどうやったというのはそのための具体的な人数の話で、そこにあなたが先ほどおっしゃったようなことをやるために、何をやらなければいけないということをあなたたちがちゃんとわかっているのかどうか。わかっていることに向けてそれは計画を立てているのかどうか。計画を一つ一つ実行しようとしているのかどうかということを見るということなのです。

だから、せっかくアドバイスいただいた5段階評価というのは、来年も出てくるかもしれないけれども、ほかの団体なんか含めて。それは私たちもきょう貴重な意見をいただきましたので、何らかの様子で形を少しいじくるかもしれない。そのようにさせていただきます。

次の団体が待っているの、最初にあれだけあなたにしゃべり過ぎだと言っていて、私がき

ようは熱が出ていてさらにしゃべってしまいました。団体には迷惑をかけましたけれども、それから事業課の人たちにもお願いというか、なかなか今たまたまその課にいて費用対効果なんていうふういろんところで言われたら、自分たちでこうモニターするのは難しいような仕事も多いと思うのです。環境だとか道路だとか何かそういうのだと、割に掛ける0.98とかやっぺこう下げるといのはできるかもしれないが、あなたたちのセクションといのはとても大事なセクションでそれをやりにくいところだと思うのですけれども、どうぞ私たちの希望です。私個人の希望だが、自分たちなりの効果基準といのか、そういうのをこううまくつくれるようにしていただければ、次に来た人たちも随分仕事がやりやすくなるのではないかなといふふうに思っていました。

いいですか。では、残った期間がありますので、今、きょうだけ頑張ろうという意見交換に最後なつたと思ひますけれども、団体さんと事業課さんと、それと委員含めて、この事業がさらにいい方向に向くように努力していければなといふふうに考えております。

きょうはお忙しい中どうもありがとうございました。

事業者 どうもありがとうございました。

久塚会長 お疲れさまでした。

(しんじゅくアートプロジェクト・多文化共生推進課・子ども総合センター担当職員退席)

(公益社団法人日本芸能実演家団体協議会・文化観光課担当職員着席)

久塚会長 では、続きまして、事業の概要及び実施状況について、提案団体から5分程度で、よろしくお願ひいたします。

事業者 おはようございます。公益社団法人の日本芸能実演家団体協議会、芸団協と申します。きょうは私、佐野と申しますが、宮川、大井とともに参りました。どうぞよろしくお願ひいたします。

芸団協は俳優の集まりであつたりとか、落語の集まりであつたりとか、各芸能ジャンルの基幹団体が集まって構成している公益社団法人です。主な業務内容としましては、実演家の著作隣接権の処理業務と、あと芸能文化、舞台芸術の振興を行つております。

では、きょう「新宿区とおき街角スポット」ということで、この内容について大井のほうから説明をいたしますのでお聞きください。よろしく申し上げます。

事業者 お願いします。資料のほうでパワーポイントを出したものが、配られているかと思うのですが、事前の配付資料です。

事務局 10月に事前に郵送している資料で事前確認書と一緒につづっております。

久塚会長 はい、大丈夫ですから、皆さん持っているという前提です。

事業者 はい。

事業者 そちらをもとにご説明させていただきます。この事業は昨年度から協働事業として開催させていただいております。ここにキャッチフレーズで「いつもの景色が、劇場になる」とありますが、新宿区内の公共的空間を活用して、ふだんは人が行き交う場所なのですけれども、音楽を聞いたりダンスを踊ったり、何かわくわくするような空間にしていこうということで、新宿区の協働事業としてご提案をさせていただいて一緒にさせていただきます。

次のページに街角スポットの開拓ということでちょっと説明がありますが、公共的空間の活用と言ったときに駅前であるとか、いろんな広場、ビルのロビーや壁面、河川などいろんな場所があるわけなのですが、そういうところが一体新宿区内のどこが活用できるかということで、昨年度は調査のほうを主に昨年度やりまして、ことしも引き続きもう少しよその別の場所が開拓できないかということでご相談をしながら進めたりしております。

調査・研究の際には、リストアップをするためにいろんな場所にアンケートを行ったりヒアリング調査を行ったりしております。パイロットプログラムとして昨年度は4回、今年度は5回イベントを実施する予定で、本年度は既に3回の実施を終えています。こちらはまた後ほどご説明しますが、すべてこういう場所で、その場所を管理されている方とお話をして、どういう時期にどういう内容のものをやると、よりその地域に行き交う方々が興味を持って楽しんでいただけるようなプログラムになるかということをご相談をして、芸術団体とコーディネートをしてイベントの実施を行っております。

最後に、活用と仕組みづくりということで、文化芸術活動の基盤整備、文化芸術振興による地域活性化とありますが、これはやはりそのパイロットプログラムを行っていく中で地元の施設の管理者であるとか、あとはほかのご協力いただいた方々に私ども、もしくはその文化活動の実感を、実際にイベントをやることで実感をしていただいて、また次回こういったことができないか、区とやることは今年度のパイロットプログラム、限られたこ

とではあるのですが、顔が見える関係になったことで、地元でまたこういった機会を設けると言ったときに相談の窓口になったりですか、コーディネートをさせていただいたりということに展開をしております。

続いて3ページ目になりますが、平成24年度の実施パイロットプログラム、簡単にご紹介します。昨年度のものになりますが、昨年度は11月29日に新宿三井ビルのロビーで津軽三味線のライブを行いました。ランチタイムのコンサートで、写真にもありますが80から100人ほどお集まりいただいて大変喜ばれるものになりました。

2回目は12月23日にクリスマスライブ、これはフラッグスビル、新宿の東南口のほうにありますビルのエントランスで、もう駅にいらっしゃる方々に向かってパフォーマンスをするというもので大変盛り上がりました。こちらは新宿東口商店街さんと協力してやらせていただく形になっておりました。

3回目は、2月27日にランチタイムアコースティックミニコンサートということで、新宿アイランドタワーのパティオでポップス系のライブをさせていただきました。

最後に、3月10日には神楽坂のほうで公園があって、子供たちがたくさん遊んでいる、毎日本当にたくさん子供たちが遊んでいるすてきな公園があったので、そこで体を動かすダンスのワークショップをやりたいということで、ダンサーの方との協力でやらせていただきました。

平成25年度の調査につきましては、次の4ページ目になるのですが、今年度の目標としましては、昨年度報告書をまとめた際にも、やはりその24年度に実施していない場所の活用、あとは新規スポットの発掘ということが一つありまして、追加で幾つかヒアリングを行っております。例えば新宿駅であっても東口のほうの商店街、末広通り商店街であるとか、あとは高田馬場のほう、早稲田大学や高田馬場の商店街振興組合であるとか、あと神楽坂は昨年度も行ったのですが、赤城神社のほうで今年度開催をさせていただいたのですが、その何かできないかということでまずはご相談に伺って、神社の方や、あとはそこでイベントを開催している方々にお話を伺ったりしておりました。

あと、西口には大変たくさん高層ビルがあるのですが、そちらも昨年度お話をし切れなかったところであるとか、あと今年度またさらに何かできないかということでご相談にあちこち伺っております。

あとは区のほうでいろんな事業を別途これと別にされている関係で京王電鉄さんのほう、また小田急電鉄さんのほうは区のほうにご紹介をいただいて、その駅の中、あるいはどう

いった場所、デパートなども持っていらっしゃるので、どういうオープンスペースがあって、どういうイベントが行われたり、また希望されているのかといったことをお話を伺う機会を区のご紹介のおかげでスムーズに調整することができました。

あとは東京のオペラシティビルであるとか、文化財団さん、東京フィルハーモニーなど、また新たに今回の地域の事業に向けていろいろとヒアリングやご相談をさせていただきました。右手のほうには5月13日に今年度第1回目の新宿駅中コンサートということで、これは京王電鉄新宿駅の西口広場のほうを使用させていただきましたしてコンサートを開催しました。こちらは京王電鉄が100周年ということで、京王電鉄側から何かこうイベントができないかということをお話のほうにご相談がありまして、それがちょうどこの街角スポットの趣旨に合致するので、ぜひいっしょにできないかということでご紹介いただいて企画が成立しました。

平日のお昼、駅の中は平日のお昼の一番少ない時間帯であっても1時間当たり3,000人ほど通行されるということで、駅員さん側は大変心配をされていたのですが、事前にもいろいろとご相談をして、音をどの程度出す、あとアナウンスの邪魔にならないようにする。あと、人がたまり過ぎて通行の妨げにならないようにきちんと誘導するなどコミュニケーションをとって実施をするということで成立できましたので、結果としてアンケートでもすごく好評なものとなりまして、やはり駅の中の少しぎわついた空間に、フルートやピアノの心安らぐ調べにすごく気持ちのいい時間を過ごさせていただきましたといった感想が多く寄せられました。

次の5ページになりますが、今年度のほかのプログラムとしましては、10月12日に神楽坂のほうで、これはお手元に別途本日配付させていただいた資料で写真がありますが、神楽坂の赤城神社の屋外にあります神楽殿に宮城記念館、宮城道雄記念館が神楽坂にありますので、そちらのほうにも社中といたしますか、けいこを受けていらっしゃるお子さんたちに発表の機会をとということでご相談をしまして、着物で子供たちが5名、小学生から中学生まで出ていただきました。これも本当になかなかやっぱりオープンな場所でやるよさといいますか、いろんな方に聞いていただける。建物の中で発表会をしますと言ったときはちょっと限られた方しかいらっしゃらないのが少し残念だなということも記念館の方々も考えていらっしゃったようで、特に子供たちが研さんを積む過程で皆さんに聞いていただいて、喜んでいただけるという場としてすごくよかったので、またぜひ実施できるのではないかといったお話もすごく出てきております。

3回目は先日の土曜日になりますが、ジャズとクラシックのコンサートを行いました。きょう配付した資料、裏側のほうに写真をつけておりますが、これはオペラシティ、東京オペラシティビルのアトリウムのおふだんは人が本当に通行するだけのスペースなのですが、吹き抜けになっていて少しエリアとして場所がありますので、ここにグランドピアノを入れまして、東京フィルハーモニーのコンサートマスターの方のバイオリンの演奏、あとはジャズのプレイヤーの尺八とピアノの演奏、そしてあと新宿にあります山野楽器の音楽教室で習っていらっしゃる生徒さんたちの発表の場になるところがあればお声かけくださいと、この昨年度からこの街角スポットの関係でそこの方ともお話をしていたので、ご相談がありまして20人、当日は18名の方が参加されたのですが、フルートアンサンブルをここで披露していただくという機会をつくることができました。

久塚会長 そろそろ終われます？

事業者 はい。あと1枚になりますので、こちらは大変好評で、また報告書のほうにはアンケートの結果も踏まえて記載をさせていただきます。あとは、また今年度は1月に東京パークタワーのアトリウムでのアートイベント、あとは恐らく3月になるかと思いますが、高田馬場駅前でもライブのイベントを企画を今進めているところであります。

これらはヒアリングに基づいて、地域の特性を生かして考えていくということでやっておりまして、最後のページになりますが、継続的な活用につながる仕組みづくりということも一つ今年度の目標としてありまして、新しくウェブサイトを立ち上げております。この事業自体では年度5回になるのですが、フィールドミュージアムという事業を別途新宿区さんと行っておりますので、そちら、区の情報との連携も図りながら、新宿区内で質の高い文化芸術イベントが開催されているということを発信するスポットにしていきたいと考えております。

あと、以上になりますが、やはりこれら区との協働事業ということで、本当にヒアリングがスムーズに進んだり、事業実施において関係者の理解が得られて、大変良好な関係が築けておりますので、それはやはり新宿区さんと協働でやれたおかげではないかと考えております。

こういった機会を与えていただいて大変感謝しております。ありがとうございます。

以上でプレゼンを終了します。

久塚会長 担当課のほうは特に？

事業課 一言、文化観光課の菊地と申します。今回協働で行ったことによりまして、何

か今のご説明にもありましたが、施設管理者の方たちのまずこの事業は理解、それから地域の特性に合わせたその音楽ですとか芸術の展開ということが非常に重要だということを確認いたしました。

そういったことが地域とやっていく中でできるのも、芸団協さんと協働したことによって、芸団協さんは非常に多岐にわたっているんなものをお持ちになっておりますので、そこが地域とやっていくという中で非常にプラスで出ていることだなというふうに思っています。なかなか課だけですと芸術活動のところについてあまり詳しくないので、地域の要望や地域が求めているもの、あるいはその場所の施設管理者が求めているものにうまく対応できていかないというのがありますが、ここが協働の利点だなというふうに考えているところです。

そして、それを実際に実施することによって皆さんが実感してもらえる、ああ、いいなということが大変実感してもらえるとという機会でした。また、それが今後の活用につながっていったというケースもございますので、そういった意味でこの協働で行った街角スポットのいわゆるプラスの面というのは非常に感じているところです。

以上です。

久塚会長 何かえらいお互いにうまくいったなみたいな話、いろいろ聞かせてください。  
はい、どうぞ、太田さん。

太田委員 自己点検シートあたりはほかの委員さんからもちょっとご確認があるかと思うのですが、私もちょっと気になった点が二つあります。ぜひ教えていただきたいのですが、いろんなコンサートその他催しものをしていらっしゃると決まったりしたとき、私たちにしてもそこへ行ったことがありますのでわかります、とてもよい雰囲気でした。

そのときにちょっと気になりましたのが、この出演者はどういうふうにして決めていらっしゃるのかなというのがあります。それとあと謝礼は一律なのかなというのちょっと気になりました。例えば出演者自体が芸団協とかかわりのある人だけなのか、あるいはそれ以外にも広げている、実際に広げてほかにも励んでおられるみたいな。

あと二つ目なのですが、これも調査事業ということで入れて、1日1万5,000円ですか、という形でいろんなところをチェックして回っていらっしゃると思うのですが、これはどのような人を使っていらっしゃるのか。何かこう例えば専門家であるとかという方なのか、あるいはアルバイトの方たちなどがかわっていらっしゃるのか。

これを質問している理由というのは今後の、今年度一応事業が終わるということになっていると思うのですが、来年度以降を踏まえて、さて、予算的にどうなのかなというのがあったものですからまず教えてください。

事業者 出演者につきましては、芸団協の組織には全くかからず、やっぱりその地域での催しに合う方ということをリサーチもしますし、あとはそのやはり質の問題、十分満足のいくパフォーマンスをしてくださるアーティストを常日ごろ拝見している中でお声をかけて予定を合わせてお願いをしております。なので、例えば山野楽器さんの先生にお願いをする機会も今回結構あったのですが、それは今回初めてやはりこの地域との連携ということが重要な要素になりますので、何かご協力いただくことができないでしょうかといったお話を昨年度から何度かさせていただいて、講師派遣でいろんなプログラムが組めますということでしたので、その時々でちょっとご相談をさせていただいて、その場合山野楽器さんは一律の謝金の規程がありまして、それに合わせてお支払いはしております。

そのほかの場合は、神楽坂の場合ですとお子さんになるわけなのですが、先生がすべてコーディネートをされて、いろいろと負担もありますのでそこはご相談を事前にして、ご負担のない範囲での謝金という額を相談をして設定させていただいております。ほかの出演者の方についても一般的というところがいろいろだとは思うのですが、3万円から5万円ぐらいですか、お一人当たりというところで、全体の予算枠もこちらもありますので、何人お出になられるか、どういうところでどのくらいの時間をお願いするかといったところで、ご本人の了解のもとで謝金のほうは決めさせていただいております。

太田委員 それで一律ではないということですね。

事業者 そうですね、はい。特に今回その26日に行ったジャズとクラシックのときに東京フィルのコンマスの方が出ていらっしゃるのですが、これはちょっとそもそもオペラシティビルの側が企画をされたいと、私たちの企画と一緒にやりたいということで、オペラシティの中には東京フィルが入っているから、ぜひ東京フィルにも出ていただきたいということでお声かけをさせていただいて、そちらの謝金についてはちょっとうちの予算の中ではとても出ないのですが、まさかそれはできなかったのも、オペラシティビルのほうが出していただいております。そういう意味でもすごく協働で。

太田委員 はい、わかりました。

久塚会長 非常にいいことですね。

太田委員 いいことです。



久塚会長 いろんなところのああやってきて、そこだけの協働ではない協働が空間的にも予算的にもできているという。

事業者 そうですね。

久塚会長 やっぱり、座長がしゃべり過ぎては大変なのでやめておこう。

太田委員 それにちょっと追加質問で、もしさっきの方たち、いろんなプロの芸術家はたくさんいると思うのですが、その方たちから手を挙げるというのは大いにウェルカムですか。決定するか、しないかは別として、もしで。

事業者 そうですね、どういった方がいらっしゃるということ、こちらはこちらで一方向的にリサーチするだけでは把握し切れないので、言っていただければ実際のライブを拝見させていただくとか、こういうところでご一緒できるといいのではないかと、そういうご提案もできるのではないかと。

太田委員 そうですね、わかりました。ありがとうございます。

久塚会長 はい、ではほかの委員。

事業者 もう一つありましたよね。

久塚会長 もう終わったのではなかったっけ。

太田委員 調査事業の身近に、手短かに。

久塚会長 ああ、そうか、そうか。

事業者 調査なのですが、私のほうがちょっと今、広報課の配属にはなっていないのですが、昨年度も調査・研究の部署がありまして、芸団協の中に。なので、一応リサーチの専門ということで、文化庁等の調査事業でも調査を担当しておりますので、メインは私のほうで行っております。あと、やはりその事業を実際に動かしていくに当たって、うちのスタッフのほうが主に一緒についてヒアリングを行う。それがやはり企画立案につながっていきますので、そういう体制で行っていて、アルバイトはほとんど雇っていません。

太田委員 はい、わかりました。ありがとうございました。

伊藤委員 私は簡単に一つだけ。今いろいろとイベントといいますか、やられているのですけれども、その継続性が話されていると思うのです。例えば月に1回第2土曜日だとか、そういう形での決まった先があるのか、ないのかということと、それと今このイベントをやるときには二つのやり方がある。自分たちが持っていく、プッシュする部分とプルの部分と、どっちが多いのかということ一つ。

それと、あと最後に相互検証シートに書いてある。

久塚会長 ページとかわかりますか？

伊藤委員 うん、自己点検シート、これは担当課の3ページ、「町会、商店街、地元イベント主催団体等にも積極的にヒアリングを行い、事業の計画を立ててきている」ということです。事業の計画を立ててきていると、立てたということですが、これ。どんな形でのものができ上がったのかということと、それとその計画を当然フィードバックしないといけないですよね、町会、商店街、地元イベント主催団体に。そこをやっているのかということ、その点をちょっとお聞かせ願えますか。

事業者 はい。継続性につきましては、特にそのオペラシティのほうで継続的に事業をやっていきたいということで、私どものほうでは新宿区の予算の中では今年度限りということですので企画することができたのですが、来年度以降はできないのですよということも毎回いろんなところでお話しているのですが、その中で確実に継続するというのは今オペラシティのほうは、ビルのほうの予算の中で定期的に開催をしていきたいということで話が進んでいます。12月14日にはクリスマスのイベントを行うということになっております。

伊藤委員 ほかの開催場所では決まっていないということ？

事業者 そうですね、神楽坂であるとかも、またぜひというお話にはなっているのですが、やはりその予算をどこから持ってくるかというのが一番問題になりますので、そこはまたご相談をしながら何かしらやっていけるといいなというのはあります。

その次といますか、何かイベントを持っていく。

伊藤委員 場所が例えばどこかそれを想定するよね。そこに対して自分たちが持つていくじゃない、こういうことをやりたいというのか、それとも芸団協さんが窓口になるのか、区のほうにこう呼びが来るのか、これをやりたいから街角スポットを利用してというのがどんな割合が多いのかという、今までやった中の。

事業者 今まではこちらのほうからお話をするほうが多いのですが、先方からという場合は京王電鉄さんのほうです。は、区のほうにお話があったということで、あと。

伊藤委員 そういうことはまだあまりこういう街角スポットということが区民というか、そこに知れ渡っていないという理解していいのかな。

事業者 そうですね、やはり。

伊藤委員 先ほどの太田さんの話もそうだけれども、埋もれていると言ったらおかしい

が、そういうアーティストがこうやりたいのだとか、いい場所ないのだとか、紹介して、場所を紹介してくださいだとかという声はまだあまり上がってきていないという判断をしている？

事業者 そうですね。

伊藤委員 そこら辺がやっぱり問題になると思うのだけれども、今後。

事業者 そうですね。

伊藤委員 あとは先ほど言った地域といろいろ話し合っただけで計画をつくって、それでフィードバックして、どんな形でやっていこうとかいう、そういうのがされているかどうか。

事業課 3点目については担当課からお答えさせていただきます。文化観光課の楠原と申します。よろしくお願ひいたします。

まず、昨年度実施した際に課題として上がったというふうに記載をさせていただきましたが、昨年度実施のヒアリングの段階とかではまだ調査・研究の部分がメインでしたので、イベント自体はまだそこまで企画を詰めている段階ではありませんでしたが、その中でも昨年度後半に行った例えばプレゼン資料の中の3ページ目に書いてある昨年度の2回目のイベント、クリスマスライブや4回目のイベント、神楽坂での公園を使ったパフォーマンスイベント、こちらは地域の商店街の中にまず町会長さんのところにお伺いして、そのまちの特性であったり、あとは障害となる例えば音の問題、交通の問題、そういったところはよくお話をお伺いして助言をいただきながら、どういったものかというのを伺いして組み立てをしてきました。

また、フィードバックの部分については、行った内容はもちろんのこと、アンケートをその場でとったものについてもご紹介をさせていただきながら、いただいた例えば音の制限とかもこういった形でクリアしてきました、あるいは町会の皆さんにご協力いただいていろいろご案内できたことで、特段皆様からも音に関するご意見などはいただきませんでしたとか、そういった実施した内容についてはお話をさせていただいているところでございます。

また、今年度に関しても、これは町会という意味ではないですけれども、ビル管理会社もその中で自治会みたいな形で行っておりますので、やはり同じようにいろいろな情報を集約させていただいて、その中で伺った意見などはこういうふうに対応しましたということでフィードバックは行っているところでございます。

例えばオペラシティにおかれましては、今回行ったことで事業の展開みたいなものが一

応一定のパイロットでやったことで一定の事業、進め方や人の集め方などが見えたということで、次年度、あるいは今回以降、ビル側でも主催してやってみたいというお声もいただいていますし、あるいは神楽坂のその地域団体、宮城会みたいなところもやはりこういうところでもできたので、今後も自分たちも発案してこういうこともやっていきたいという声もいただいていますので、発展性についてはまだまだもちろんこれからかと思いますが、続けていくことが大事なのかなと思っております。

伊藤委員　すると、今、町会や何かを母体としているものに関しては、町会の連合会みたいなのがありますよね。そういうところへ披瀝することも必要だと思うのです。大きなビルというのはそこの関連で結構話が長くなってしまいうけれども、町会連合会だと、ああ、そんな形でうまくいったのだ、水平展開。では、うちの、極端なことを言えばお祭りのときにもやってみようかだとかという話があると思うので、そういうのもこの区民に知らしめていく方法ではないかなとは思いますが。

久塚会長　はい、野口さん。

野口委員　私、神楽坂のイベントにちょっと行って見たのですが。

事業者　ありがとうございます。

野口委員　出ている方が子供さんで、これからそういったお琴ですか、上達してまた人に聞かせるような形になるのだらうと思うのですが、ああいう地域でそういったものがお祭り重ねてやると、なおまちの活性化にもつながるのではないかなというのがやっぱり。ああ、見て、本当に、ああ、よかったな、これからもこういうあれが続けばいいなというように感じを受けました。ぜひそういったことを参考にして、そういう催しと合わせてそういうものも入れたら、もっとまちが明るくて活性化していくのではないかなと思えました。

久塚会長　ほかに、はい、宇都木さん。

宇都木委員　宇都木と言います。大変申しわけないですけども、区と皆さんの協働事業なので、できるだけ区民が見えるようにしなければいけないのです、区民参加が促進されるようにならないと思うのです。

今、皆さんから報告いただいたことによると、今のところは演奏活動が中心になるのですか。中心になるというか、芸団協さんは演奏活動以外のことはあまりおやりにならないのですか。

事業者　いえいえ、そんなことはございません。最初の冒頭に私が申し上げたとおり演

劇であるとか音楽であるとか、もちろん落語協会のようなところとやるとか、そういったところの基幹団体が67集まっていますので、決して音楽に偏っている団体ではもちろんございません。

宇都木委員 だから、その演劇もそうなのだけれども、文化のほうはらち外ですか。

事業者 文化というと。

宇都木委員 例えば絵だとか、書道だとか、写真だとか。

事業者 今度1月には絵をかく、子供たちと絵をかくイベントを企画しています。

宇都木委員 ああ、そういうのもある。

事業者 はい。

宇都木委員 つまりその場所の開発もそうだけれども、区民が参加しているいろんなことができる事業が、区民参加のそういう事業がどんどん進んでいかないといけないのです、場所があったって。それは芸術家の人たちが発表することは、それはいいかもしれないが、ポイントはこのことによって地域を変える、社会を変える、市民の生活が豊かになるというところにつながっていかねばいけないので、演奏家がもうあったってしょうがないのです。

だから、そのところが見えるようなもう少し補強をしてもらいたいなと思いのですけれども、どうですか。

事業者 そうですね、すみません、ちょっとご説明がわかりづらかったかもしれないのですが、企画の中でできるだけその一般の方も参加できるような、例えば今回は山野音楽教室でフルートを習っている方々18人、皆さん一般の30代から60代、80歳ぐらいまでいらっしゃるとおっしゃっていたんですけれども、方々であったりとか、あとは神楽坂のほうも地元の子供さんたちということで、その場所と、あとはどういう方に聞いてもらうかは、その環境の問題も含めてできるだけ区民の参加ということも考えながら企画は進めておりますので。

宇都木委員 あと、それからこれ、やられるのか、やらないのかわからないのですけれども、区民の皆さんがかなりいろんなサークルをつくったりやっていますよね。そういう人たちが積極的に出かけているんなことがやれるような、そういうのをするためにどういうサークルがあるかというのの調査みたいなのはやられたのですか、やられていないですか。

事業者 区内の文化施設に登録されている団体あてにはアンケート調査は対象として昨

年アンケートをお送りさせていただきました。

宇都木委員 アンケートをやった？

事業者 はい。

宇都木委員 その結果はない？

事業者 あまりちょっとその反応が。

宇都木委員 だから、それは報告はできるのですか、アンケート。いずれ報告書の中に入ってくるのですよね。

事業者 昨年度の報告書の中に。

宇都木委員 あれ、ほかはないですか。団体の、登録されている団体だけではなくて、こういう場所を活用できる可能性のある団体がどういうところであって、どういう働きかけをすればこういうところの場所もそうだし、団体も参加してくれるという、そういう積極性が、事業の外に向かったの積極性がないと、なかなか区民は知らせること自身も大変なことです。だから、そういう積極性のある活動を何か工夫していかないと、物すごく限定されてしまう格好になるのです。

事業者 今、委員がおっしゃった区民のサークル団体とか、主に私がイメージしたのは生涯学習とかそういった館に登録しているところとか、あるいは地域センターに登録しているいわゆる区民団体かなと受けとめたのですけれども、そこに対しては今回出演のご紹介とかは実際問題はしていなかったのですが、実際こういうところでこういう催しものを行いますというのは、地域センターや生涯学習館にももちろん情報をおろしておりますので、そこでごらんになった方がもちろん相談に来てくれれば一緒になって考えたいと思いますし、情報の発信の部分ではやってまいりました。

ただ、アンケートとか、そういったところで集約するところまでは役に立っていません。

宇都木委員 参考になるかどうかわかりませんが、この新宿で言うと都庁までに行くあの通路があります。あそこで展覧会をよくやっています、展覧会。ああいうところに例えば区民が自由に展示できる期間を区切ってとか、私のうちのそばで言うと駅のそばにガードがあるのです。そこに俳句クラブだとか川柳クラブだとか、それから時期になると七夕の子供の絵だとか、そういうのを自由にこのサークルで学校ごとだとか、サークルだとか展示している。ああいうのは比較的区民の交流になっているのです。

だから、そういうものをできれば日常的に市民が積極的に自分たちの事業として展開できるきっかけづくりをここが提供しないと、もともとこの条例で言う創造的な公共空間を

使った創造的な市民の活動なんていうのはでき上がっていかないのではないかと思いますので、そういうことを検討されたらいかがですかね、と思いますがどうですか。

事業課 あと区事業の中、あるいは区の新宿未来創造財団の事業の中でも、例えば委員が今おっしゃった大ガード“みるっく”かなと思いますが、あのガード下の展示室、ああいったところは現時点でも活用を続けておりましたので、今回のこの街角スポットというくくりの中では事業展開の一つには、ヒアリングは行ったかと思いますが、その場で何か事業を展開するというのは未来創造財団の事業であったり、区のほかの事業の中にゆだねておりましたので、今回は展開はしておりません。

ただ、もちろんおっしゃっているようにそういうふだん活用しているところも、より皆様に知っていただくための情報発信であったり、活用の仕方をもう少し知っていただくという取り組みは大事かと思しますので、重々その辺を含めて事業展開を考えたいと思います。

宇都木委員 ちょっと極論かもしれませんが、このままでいくと芸団協さんの活動の一環になってしまうような気がするのです。芸団協さんの活動の一環ではなくて区民の、区民がどうやって参加するか。そのために芸団協さんがどういう役割をしてもらうかというのが協働事業の趣旨なので、芸団協さんが事業をするために公共空間を開発しようというのではないのだ。

そここのところをもう少しそっちを前面に出してもらっていかないと、結果としては残った姿は芸団協さんの活動の場としてしか写らなかったみたいなことだと協働事業としてあまり好ましくないで、そこは行政と芸団協さんとの間で少しお互いに知恵を出し合って工夫してみたらどうですか、次の事業は。

事業課 そうですね、今回私も、私どもも事業を展開するに当たって区民、区民参加という意味はもう少し広くとらえていて、その鑑賞者の部分での区民というケアは非常に大事にして展開してきましたが、委員おっしゃるように実際の発表される方々という意味では少し意識が薄かった部分も正直ございます。

ただ、アンケートをとる中で、フラッと立ち寄った方、地域に住んでいる方が帰る途中に本物の音楽に触れて非常に楽しい気分だった、安らいだ気分だったとかアンケートも拝見しておりますので、鑑賞者という意味での区民というところでは一定の成果があったのかなと思っております。

そこは考え方としてほか、どういった形で今後参加していけるかどうかは、芸団協さん

と一緒に考えていきたいと思います。

宇都木委員 長続きしないものね。

事業課 そうですね。

宇都木委員 協働事業で予算がなくなってしまうたら芸団協さんたち、ただ働きしませんよ。だから、そうではなくて持続的に、継続的にそういうことが日常の中に行われるようなそういうことにしていこうということだから、この本来の目的は、条例もそうだから。だから、そこを少しこの期間の間にどういう仕組みをつくればそういうことが可能なのかということをやらないと、芸団協さんだって気の毒だよ。何だ、あんたたちの稼ぎをちょっと応援しただけかなんていう話になってしまっはまずいので。

事業課 ただ、この活動を通してビル事業者さんが持っている予算とかもこういったところに使ってみたいという発案もいただいていますし、発表してくださった団体さんも何とか自分たちでうまくやれるようにということで、必ずしも区予算の中でやらなければならないというのでは長続きしないので。

宇都木委員 そう、そういうこと。

事業課 町場の方、あるいはビルの方々、いろんな方のその協働の力で発展できるような一つのきっかけにはなったかなと思っております。

宇都木委員 はい、頑張ってください。

久塚会長 やっぱりこれだけのお金ではなかなか来てくれない方とか借りることができないとか、いろんなのを組み合わせていく工夫が、既にもう課と芸団協の実績を踏まえれば実力としてあると思うので。ただ、そこに安住するのではなくて、さらにさらに参加者の中にもこの事業の目的のところにも書いてあるようにリストアップ、早くリストアップしてその場所に芸団協が持っている、こうストックしているところだけではなくて、一般にその地域の活性化を進めることを目的として当事業を実施するということに向かって頑張ってもらえればなど。十分ご理解いただいていると思いますので。

ほかの委員の方はいかがですか。竹内さん。

竹内委員 竹内ですけれども、今の内容にも関連すると、私は最初街角スポットと言うから、今、宇都木委員が言ったようなスポットを開拓していくのだと思っていたのですが、どうもそういうあれではなくて、立派なアンケートをつくったり、いろんな駅前開発とかそういうのをやられているわけですが、その中で今回の確認書の中ですべてがうまくいっているけれども、1点だけ「成果目標が不明確であった」というのが1ページ目に書い



てあるのですが、この成果目標は確かに非常に多分はかりにくいと思うのです。いろんなイベント、これをやりました、これをやりました、これをやりました、そういうのは出ているのですけれども、ではそのイベントをやったことによって今回の協働事業の目的は、「文化芸術創造のまち 新宿」の実現につなげるというふうにしてしまっているのです。一体それは何をやるのだと。非常にそのフレームが大き過ぎて見えないのですけれども、そこが一番実は重要なところだと思うのです。

では、フィールドミュージアムと何を目標にやっているかという、四つぐらい上げていて、要するに文化芸術振興のためのネットワークの構築というのが一つです。それと、新宿のまちの魅力の創出というのが二つ目で、三つ目が区民でつくり上げるもの。四つ目がまち歩きが楽しいと。だから、ここ、もしこの文化創造のまちにつなげるのであれば、そこにキャッチアップして何かやっていないと、ただイベントをこうやっていますよということではつながらないと思うのです。そこが一番肝心なところなので、最初のそのフレームワークを決めたときに、その辺をきっちり決めていってから事業をやらないと、どうやって成果目標を決めるのよというようなことになってしまうので、そこがもう少し明確に姿を描いてもらえるといいのではないのでしょうか。

それと、いろいろこう立派なアンケートをつくっていただいて、アンケート結果を見ると、いろんなこう課題が上がって行って、この街角スポットをやるのに対しては例えば費用がかかるとか、あとは芸術家の質が必要であるとか、課題が物すごくあります。

そうしますとこれをやるには費用がなければできないわけです、結局。そうすると、今後継続していくためにはこれ、区がその費用を負担して経常事業でずっとこのフィールドミュージアムの中でやっていくのか、あるいは多分これ切れてしまったら芸団協さん費用がないから多分もう進まないと思うのです。その辺は区として、あるいは芸団協さんとしてどういうふうはこのアンケート結果を踏まえて考えているかというのをちょっと教えていただければと思うのですが。

久塚会長 宇都木さんから質問、指摘されたところと重なっている部分もありますけれども、何かありましたら。

事業課 では、文化観光課のほうからお答えさせていただきます。まず1点目の目標の部分ですが、委員おっしゃるとおりかなり目標、数値でなかなか目標を定めるということが当初厳しくて、数値目標を持たずに来ているというところは確かにございます。

その達成感みたいところで、聞いている方たちからは毎回アンケートをとって整理し

で評価をしていますので、そういった形での効果測定みたいなものはできると思いますが、ただ一方でそのさらに地域への活性化というところで、来た人だけではなくてその後、地域にどういうふうな効果が得られたのかというのは、町会長さんなりとかかわっているところはヒアリングでいただいておりますが、そういったものもきちんと残ったところも追究していきたいというふうに思っていますので、そういったものを持ちながら、先ほどおっしゃいましたフィールドミュージアムの中でやっています四つの目標のところに兼ね合わせてどうなのかということを検証していきたいと思っています。

そこがなかなか数値で幾つですと出せないところが非常に厳しいところではあるのですが。

竹内委員 数字でなくてもいいと思うのです。

事業課 ええ、でもそこはやっぱりきちんと検証する必要があるというふうに。

竹内委員 状況とか状態でいいと思うのです。

事業課 はい。それは認識しておりますので、最後まできちんとそこはやっていきたいと思っております。

それから、今後の展開の部分なのですが、今お話のあったフィールドミュージアム事業というのは、これは区が主催で動いてはいるのですが、実はこのフィールドミュージアム、10月、11月を文化月間と定めて、ここに出ている団体さんというのは各種、新宿区でさまざまな展開をされている方、もうアートから歌からすべてございます。そういった団体さんはもう自分たちの費用でこの事業をすべて展開しております。今後はこのフィールドミュージアムの中に街角スポットの活用事業を入れ込みまして、こういった団体さんたちがそれぞれ自分たちが今やっているのをさらにこう広げていくという考え方のもとにコラボをしてもらったり、まさに協働です。絵とそれから音楽が協働して、そしてそれの中で街角スポット、今までやってきた中で非常に効果があるというような場所をお互いに使いながらやっていくということで、費用を新たにかけるのではなく、今ある資源をお互いにこう提供し合うことによっていい効果を求めていくような、例えば美術館で音楽演奏をやる。もともと別々にやっていたものを一緒にコラボして、その場所を使うことによって経費をかけないでやっていける。

あるいは、地域の中でやっているイベントに区民団体の方でやっている生涯学習団体なんかの方たちもこの中に幾つか入っておられます。さっき言った“みるっく”の活動なんかも入っていますので、そういった絵をどこか別の場所で掲げるとかというようなそうい

った取り組みをこのフィールドミュージアムの中に入れて、街角スポット事業をさらに拡大し、充実していきたいということを今考えております。

そこにはもちろん今までずっと協働でやってパートナーとして来た芸団協さんには助言的な意味でどういうふうにコーディネートすることがいいのか、プロとしてそういった助言もいただけたと思いますので、そこにも今後は経費を云々という部分ではないのですが、やはり一緒にコーディネートしていただく部分で、パートナーとしてやっていっていただければと思っていますので、お金をかけない中で、よりある資源をどう生かしていけるのかというのも行政のステップとしては必要だと思っていますので、そんなふうに整理をしています。

久塚会長 そうだね。ふだんだったらすごくお金がかかるような方も、自分できょうはこれぐらいでって言ってくれと、それぞれが30%オフずつぐらいのことでうまくいくわね。

事業課 はい。

宇都木委員 社会貢献でやってくれるとかね。

事業課 例えば場所が。

久塚会長 いやいや、それは内容はそうだけれども、社会貢献という名前がつくとちょっと何か気分がふにやっとなるので。

事業課 はい、そうです。例えば1人で出演すると場所代から音響からすべてかかるわけですが、経費が。ただ、ある場所が提供されることによって、出演家さんはその場所代がただになる分、そのトータルの経費が下がるのでそこに例えば回せるとか、それはそのお互いのパートナーがどこをそれぞれコラボするところがどこの部分を出し合うかという部分は、そのケース、ケースによってすべて違うと思いますが、そういったものでなされれば。

久塚会長 そうですね。だから、資源を、持っている資源を別々にするのではなくて、私は空間、私は能力、私はと持っているのを自分はこれを提供する、これを提供する、これを提供するとすれば、あとは区民が参加者として自分の持っている時間を提供してくれる参加してくれるということになるので、既にある程度の素地はありますから、そこで安住せずにさらに新宿のまちの感じを変えていけると思うのです。もう。

宇都木委員 吉本もあるのだもの。

事業課 そうですね。

宇都木委員 だから、本当。

久塚会長 パリのだ真ん中で。

野口委員 大学のグリークラブとか吹奏楽部とか、そういうのを使ったらすごく安くできるんじゃないの。ここ、新宿は大学が多いのだから。早稲田なんか。

久塚会長 早稲田は高いから。

宇都木委員 早稲田の応援団に頼めば百発百中が出るよ。

伊藤委員 場所は二極分化だよ。それ、結局こういう大型施設、個人というか、区が思っているようなものと、それと地域、町会みたいなところに遊休して残っているもの。そういう二極分化なので、今はどっちかという目立っているのがこの大型施設で目立っているの、やはり先ほど宇都木さんや何か皆さん言われるように、この地域の遊休のやつが上がってやっていくということと、あともう一つはその街角スポットの情報、まだ少ないからそんな情報を発信して、ここには載っているのだけれども、街角スポットの情報を整理発信すると。調査段階のものは整理できるだろうが、使用できるものの発信はまだそんなにないから、ここも早くでもう終わってしまうけれども。難しいよね。

久塚会長 事業課は11時からあると思いますので、どうぞ。私たちはあと団体にちょっとお話をしますので、お仕事に戻られてください。

事業課 はい、ありがとうございます。では、申しわけありません。

宇都木委員 難しいよな。

伊藤委員 うん。

久塚会長 だから、課のほうにはもう発言、ここでとめますので。

事業課 ありがとうございます。

事業課 私は残ります。

久塚会長 大丈夫ですか。仕事に穴があく。あなたがいないと回らないと思うので。

事業課 こちらも非常に大切な意見をいただけるので。

伊藤委員 質問者が行けばいいのですよね、判こついているか何かしているのを。

事業課 申しわけございません、ここで退席させていただきます。申しわけありません。

宇都木委員 やっぱりいろんなところとやっぱりコラボレーションしないと、それとな。お祭りなんかそうだよな、あれを見ていると。

伊藤委員 午前中そういうのを呼んでやるとか、地域、地域の隠れているアーティストを呼ぶとか、そういうところが地域とのやはり密接なつながりになっていくのではないか

と思うね。

太田委員 各地域のお祭りなんかにはちょこちょこ行くのですけれども、何かもうパターン化されていて、毎年同じ消防署を呼んで何という意味なのか、何かこう本当に何か変わればえしないというか、そういうところでこう新しい人たちを次々と展開することで、もっとう住民がすごくこう何だろう、わくわくした空間が新宿区内に生まれるかなと思っているのです。あれがもっともっとうどういう人が、地域で何ができるというのがいるのかというのをこうマップにされたらこれからいいのです。

久塚会長 はい、もう時刻が来ましたので終わらしましょうか。芸団協、担当課のほうから一言ずつ何かございましたら、最後に。

事業者 今ちょっとお話を伺っていて、私ども今回やって、ああ、すごくよかったなと思ったのが、出演者の方々がやっぱりちょっとふだんはコンサートホールとかライブハウスとかでされる方が少し環境が悪いので、寒かったりとか、音が気になるとかでどうなんだろうというのをすごく気にしていたのですけれども、出演者の方々でも皆さん口々にこういう場所でやることってすごくいいんだねというふうになにかすごく喜んでいらっしやっただけで、多分それは本当にふだん来ていただけないような方々に聞いていただける。

オペラシティの場合はもうベビーカーで連れてお母さんたちがたくさんいらっしやったりとか、幅広い年代の方々がこう偶然通りかかって、ああ、聞けてすごいよかったと、やっぱり出演者の方々にも伝わりますので、何かそういう機会がくれたというのが本当にこの街角スポットの魅力なのかなとも思いますので、ぜひその来年度以降も区のほうとも協力しながらこれまでの実績から何か展開していきたいとは考えております。

久塚会長 だから、やっぱりオペラ座だけではなくて、モンマルトルの丘でやるというのは、やっぱりあっちのほうがいいですよ、観光客から見ても。あれは。

事業者 気持ちいいですし、外で。

久塚会長 うん、新宿のまちはああいうふうにならぬ。

事業者 でも、この間そのアンケートでも新宿区との事業をやっていますとこうアナウンスもしていたので、いや、さすが新宿区、いいですねみたいな評価もいただきましたけれども。

久塚会長 自分で書いた？

事業者 ああ、違います。

事業課 いただいたアンケートです。

事業者 アンケートに書いてありました。

久塚会長 ちょっと心配したのです。それで、ご存じでしょうけれども、ZAZ A、ZAZのジャズ、2011年からブレイクしていますが、彼女、モンマルトルでやって、それでエディット・ピアフの再来かと言われながらやっぱりすごいです。地下鉄でもやっていたけれども、やっぱりモンマルトルが一番自分の声に合っているということ。

宇都木委員 多いよ、あそこも、やっぱり。

久塚会長 うん、だからそういう雰囲気と違いますものね、やっぱり。どうして違うのでしょうかね。

事業課 うーん、だから例えば今、地下鉄、モンマルトル、地下鉄の話とかもありましたけれども、駅側もいかにせん人が多過ぎるところが、駅の方々からもなかなかご意見をいただいたときがあって、やってみたいのだが安全面のほうを考えてしまうと、少し生活、あるいは自分の業務の範囲を超えずにはまだ考えられていないというのがあるので、芸団協さんの中の確かこの評価か総合シートにもありましたが、まちの方々の意識の醸成みたいなものは、今後も引き続き取り組んでいかなければいけない課題の一つだねというの。

久塚会長 まちの人たちは結構勝手に、自分が気分がいいときはあれ、いいなと言うけれども、毎日見ていると出ていけというような感じになってしまうので、これは意識の醸成というふうにおっしゃいましたが、大学でもたまに応援団が慶応と張り合っているのはいいなというのは、早稲田で言う、教員やっていてよかったなと思うのだけれども、あれ毎日昼休みにやっていたらもううるさい、うるさい、出ていけと言いたくなつてはいけませんが、彼らの授業料でおれ、月給もらっているからあまり言えないけれども、それはやっぱり何かあれがいいらしい。

キャンパスツアーに来た外国の方とかそういうのを見ると、やっぱり毎日中学生とかバスで来るから、それは毎日やることもいいと思うけれども。

新宿のまち、勤めて何年になられますか。

事業課 勤めて10年目ぐらいです。

久塚会長 課長さんは。

地域調整課長 私は30年、29年ですかね。

久塚会長 変わりました、大分？

地域調整課長 変わりました。

久塚会長 ああ、前の部署はどこだった。

地域調整課長 文化観光課です。

久塚会長 これは大変だ。

地域調整課長 私なんかがしゃべってしまうといろいろ団体、区の担当課のほうにも影響が出てしまうので、今回私は傍聴に徹したいと思います。

久塚会長 いやいや、いつ引っ張り出そうか、いつ引っ張り出そうかと思っていたのだけれども。

伊藤委員 大きな形で新宿中央公園をモンマルトルの丘にとか、そういうのをこうやって。

太田委員 ああ、いいよね。

伊藤委員 ぶち上げてね。

太田委員 やっぱりあまり違うからやりにくい。

宇都木委員 だから、ある一定の時間とかそれ、開放して。

伊藤委員 そう、そう。

宇都木委員 代々木公園のケヤキ通りでやっているじゃない、若い人たちがジャカジャカジャカジャカだれも聞いていなくても。だから、でもあれはあれであの出ている人たちが満足ではなくて、あそこを通っている人たちも、ああ、こういう人たちがやがて育っていくのだろうなど、そういう目で見えていったりするのだ。

伊藤委員 そうそう、あそこでやっていたグループだよねとか。

宇都木委員 そうそう。だから、それは大事なことなのだ、きっと。

太田委員 大事なこと。

伊藤委員 発信するというか、アーティスト。

宇都木委員 うん、私も友人だけど弦哲也というのがいるでしょう、作曲家の。芸団協の皆さんは知っているだろうけれども。自分のところに来ている売れない子をお祭りのときに連れてきて、自分が連れてきて披露するのだ。だれも聞いてはいないこともいるが、ああいうのは両方にメリットがあるわけだ。地域はにぎやかになるし、彼らにとれば宣伝の場になるし、無償で来るわけだから。

久塚会長 いや、人がこう見向きもしないようなところでやっているときに訓練されてくるものね。最初声を出すだけでも大変なので。で、声を出すだけでも大変というのは、一般に歩いている人がいるから大変というよりは、ここでやったら怒られるのではないか

というところから始まるとすると、あなたたちはスポットでここでやっても大丈夫だよと言う。

宇都木委員 場所を提供すればいいのだ。

久塚会長 つくってあげることとはとても大事なことです。

伊藤委員 だから、テレビに。

事業課 駆け出しの方とかに、さっきちょっとお話が出ていましたけれども、少し見た方が気に入って、その人が売れていくのをこう楽しむ方々もいるというのは私も聞いたことがあるのですが、今回なんかも三味線をやりました。

久塚会長 そうそう。お役所がどうせやっているのでしょうというふうにならないように。

伊藤委員 そうそう。

久塚会長 モンマルトルにしても地下鉄にしても役所は後ろに行っている。押し出している。自由に見えているけれども、ちゃんと規制がかかっている。だから、それをうまく新宿区だったらできると思うのです。やっぱり私もこちらの大学に来て20年、最初は久しぶりに東京に来たなとわくわくしていたけれども、最近歩いていてうざったいなという感じに。うざったさ、1人ではあるのだが、私自身。何かもうちょっとすっきりさわやか、いい感じ、何かこういいぞというのが。

太田委員 そうですね。

久塚会長 何と、うーん、なりかけていたのにね、ちょっと道を間違えて違った方向に行きかけているので、もう一遍戻ってこっちへ行ったのではないかというのがあるような気がするのです。道交法とかあって大変難しいとは思いますが。

宇都木委員 それはしょうがない、どこだって乗り越えないと。

竹内委員 まとめるところに要するに場所は大体探しました。では、そこに寄与する、今これを見るとどうもプロの集団を登録制にしたいみたいなことが書いてあるのですけれども、プロにするのか、アマにするのか。たまたまこの間発表していたときも、来ていた人がそこに参加できるのですかみたいな質問もあったりしていたのだが、だからその辺がフレームワークというか枠がちょっとはっきりしていないので、だれでもそこに参加できるのか、芸団協の関連した人しか参加できないのかみたいなところが非常にあって、もう一つ何か狭い範囲になっているような気がして。

伊藤委員 さっきも言ったけれども、それがはっきりこう表明されていないからでしょ



うね。

竹内委員 うん。

野口委員 協働事業だから。

伊藤委員 区民参加とかね。

竹内委員 いろんなことで、今、だから例えばお昼のコンサートみたいなあちこちでもう物すごく今ふえています。ああいうところには多分草の根の方が、やる人がいっぱいいるのでやっているとは思うのですけれども。ここのフレームはちょっともうちょっとビッグなところを目指しているようなので、ちょっと違うのかもしれませんが。

伊藤委員 竹内さんのグループは参加できづらいですか（笑）。

竹内委員 いや、全然できますよ。

太田委員 ギターでも。

竹内委員 私のバンドを持っているのだけれども。

野口委員 おやじバンドね、おやじバンドでね。

竹内委員 大体でも病院とかそういうところでやっていますので。

野口委員 そういうのは安く上がるよね、おやじバンドを使えば。

竹内委員 だから、そういうのだと一線を画しているようなので。

久塚会長 いやいや、やっぱり。

伊藤委員 そこだよ。

久塚会長 逆に言うと私の友人のプロも、1人で無料でボランティアで高齢者の施設に行っていますもの。そうなったときに、また素人は病院からも老人ホームからも排除されてしまうので、プロも素人も一生懸命練習しましょう。

竹内委員 だから、ちょっと。だから、フィールドミュージアムというのはどういう位置づけで、どうしていこうかというのがいま一つ明確ではないです。

久塚会長 まあまあ、芸団協さんは自分たちの仕事はこれだってやっぱりあるので、そこに昔の新宿フォークゲリラみたいなのを求めても仕方ないと思うので、これ、切らすうちにちゃんとやってくださいというところでいいのではないですか。

長い間好き勝手に、もう後半はほとんどこちらだけで話したという、多分違うほかのことを考えていたと思いますので、引きとめましてどうも申しわけございませんでした。

きょうはお忙しいところ本当にありがとうございました。

事業課 ありがとうございました。

事務局 ありがとうございます。

久塚会長 担当課のほう、戻ってください。

(社団法人日本芸能実演家団体協議会・文化観光課職員退席)

久塚会長 一つ目のヒアリング、それについて約10分程度、いただいた時間、非常に来てはあれなので、そして二つ目に10分程度、もうそれぞれお話になったと思いますけれども、情報交換といいますか、自分はそこに行ってみて、きょう発言しなかったがどういふうにこのヒアリングにかぶせてこういう意見を持っていると、個人の意見で結構でするのでそれをお出しください。最終的にきょうやったヒアリングにそれぞれの委員がかぶせて評価をするという形になっていくかと思しますので、ご発言がありましたら一つ目のアートプロジェクトから始めたいのですが。

伊藤委員 アートプロジェクトに関してなのですからけれども。

久塚会長 お名前を。

伊藤委員 伊藤ですけれども、やっていることはやっているのだが、レビューの仕方とかかまとめ方をもう少し工夫してもらいたい。聞くとドンドン出てくるのだ。

久塚会長 上手ではないと言えいいじゃない。

伊藤委員 そう、ドンドン出てくる。そういう経験がないのだと思うのだ。

久塚会長 うーん、経験が。

伊藤委員 お話はうまいので、うまくもないな、短くないから。

太田委員 時間は考えていない。

伊藤委員 うん。

宇都木委員 簡単に言うと、自分たちの活動は人にわかってもわからなくてもマイペースでやるということなのだ。

伊藤委員 昔から一緒だ。

宇都木委員 うん、だからそれが今問われているので、それが問われているのです。つまり社会的な説得力を持たないと、こういう活動は広がっていかない。だから、そういう私たちは一生懸命やってこれだけ成果が上がっていますという、ある意味では自己満足みたいなものでとどまってしまうと、こういう協働事業だとか、広く社会を変えるとか、地域を変えるとかというところにつながる意向としては、やっぱりその意識が弱いのでは

ないかと思う。

久塚会長 特に多文化の育成と言っているから、自分たちが一元的な価値観だと。

野口委員 大久保のお祭りでこの団体が参加したので。

久塚会長 ああ、写真。

野口委員 それで見させてもらったのですが、何か自分たちの自前、自分たちだけの世界みたいな感じで、全然それがPR効果とか、あるいは目的をこういう目的で我々は協働事業を区とやっているのだというそういったPRというのではないけれども、そういうことをもう少し団体として出すべきだったのに、何かその踊りを踊って、さあ、旗を立てて、それでサアッとそのお祭り参加やったよなんて、あれもさっき言われたように手前勝手な自分たちだけの団体としての活動としか見えないので、区民に参加してもらいたいと言うのだったら。

久塚会長 撮ってくれた写真と出してくれた写真と何かちょっと感じが違いますよね。

野口委員 区民が全然参加していない、区民にアピールしていないのです。

太田委員 そう、そういうふうにかかわる。

宇都木委員 演技者だから、出演者だから。

野口委員 何をやっているのかと思うぐらい。

宇都木委員 出演者なのだ。

伊藤委員 出演者と説明者というか、いる人たちを。何のためにやっているのかと。

久塚会長 あともうお二人にして。

宇都木委員 出演して満足しているのだ。

久塚会長 私からこう回って。

野口委員 全然何やっているのという感じで、イベント参加して。

伊藤委員 何をやっているのかは、自分たちがチラシ配りなり何してこういう形でやっているの、ぜひ今後ともいろんなところをやるから見にきてくださいとか。

野口委員 そうです、そうです。

伊藤委員 そうというのが仕掛けが下手なのだ、ない、考えつかないのだ。

久塚会長 太田さん。

太田委員 すみません、同じように私も気になっていることが実はあって、大久保図書館のほうに写真のその子供たちがつくったまちの想定、立体3D写真を展示したり何かしたりしたらどうですかということで館長さんと引き合わせたのは私なのですがけれども、そ

の後ももう1回このお祭り、館内での図書館まつりがあったので、私たちが出たので小林さんにもちょっとお声かけをして当日こう持ってきていただいた、広い場所で。

そのときすごく気になったのがただ並べて、「太田さん、忙しいのよ、だれも来る人いないのよ」とか言いながら、ただこう並べてじっとこう立って、小林さん立っていらっしやったから、えっ、何かこうみんなにこうもうちょっとアピールされていないのかなとすごく気になっていまして、それが今のきょうのお話の中で、ああ、なるほどね、そのあたりがやりましたよというのは確かにおやりになって頑張っているのだけけれども、そのPR力というか、どうやれば引きつけられるかとかいうノウハウが。

野口委員 参加しているか、サポーターになってくれるとか、いろいろね。

太田委員 そう、そうなのです。その辺がちょっとやっぱり一つの枠組みの中で一生懸命やって頑張っているのかなと。

久塚会長 一つ目と二つ目は同じような芸術文化にかかわるコントラストはありますけれども。

太田委員 あります。

久塚会長 華やかな感じがする、で行ける。それだけにお高くというのはあるのだと思う。一つ目はちょっと寂しいなという、どうにかならないものかねと。

伊藤委員 ただねと、ただねという気になる。

宇都木委員 NPOの教育が悪くて。

久塚会長 はい、宇都木さんの責任？

宇都木委員 そう、そう、私の責任。NPOの教育がよくない。

久塚会長 うーん、竹内さん、ごらんになりましたか。

竹内委員 今、一緒に見えています。

宇都木委員 NPOって内にこもってしまうのです、どうしても自己満足になってしまっている。

野口委員 そうなのだよね。

宇都木委員 だから、外に広げていく努力をしないから。それで、一つもみんな私たちこんなに一生懸命やっているのにわかってくれないと、最後そうになってしまうのです。

だから、何のためにやっているのかということよりも、そのきょうはこれをやりましよう、それが自己目的になってしまっていて、それが広げるためにやるとか、みんなにアピールするためにやるとか、大きな仲間をそこで広げるとか、そういうことを本当は計画の

ときは思っているのだろうけれども、やっている人はそこで何かやったら終わりとなってしまふのです。

野口委員 何かもったいないな、せっかく。

太田委員 もったいない。

野口委員 そういう場を与えられたのに。

宇都木委員 そういうことをきちんと計画してプロデュースする人がいないというか。それが日本のNPOの弱いところです。だから、一生懸命やって。

久塚会長 宇都木さん、まだ頑張らないといかんよ。

宇都木委員 だから、東北の支援もそうだけれども、一生懸命やっているのはやっているのだが、それだけで消耗してしまうのだ。それを帰ってきて広げをしないから。だから、広がらない。

太田委員 多分やりました、出しました、一部もうそこで終わりましたで自己充足で終わってしまう。

宇都木委員 除染作業に行っている人が言うわけ。月に2回行っているの、金曜日の夜バスで行って、日曜日の夜帰ってきたけれども、その人に聞くと、「除染は本当に役立っているの」と言ったら、「宇都木さん、役になんか立っていませんよ、雨が降ったらまた元通りです」と言った。「では、何でやるの」と言ったら、やっぱりやり続けることがこの除染が必要なのだということと、やっぱり放射能というのは危険だということを知らせることになるからということで一生懸命やっているわけだ。

だけど、それだけで終わってしまったら、その人が倒れたら終わってしまうのだ、それで、仲間を連れていかないと。だから、帰ってきたら仲間をふやす活動をしないといけない。

伊藤委員 広がりがないよね、広報というか、これではまだ人が足りないのだから参加して。

久塚会長 ただ、やっぱり広げるというのは難しいのだ。自分の中にある宇都木さんみたいにこれはいいことで、本当に何と言われてでも1人でもやる。だけど、こんないいことでやったらスカッとするから一緒に連れていくみたいなの、半分だましてみたいの。あれのパワーがなぜ出てこないかという、そのやっている個人の中にどこかに違うのではないのかとか、申しわけないけれども、あの人を連れていくことのほどでもない。時間割いてもらうことは悪い、それを何か犠牲みたいにして行っているみたいなのところがあって、そう

ではなくてあんたはこちらを犠牲にしても一緒に行くべきよと、それぐらい大事よということに頭の中を組み立て直していないのだ。

宇都木委員 うん、やっぱり続けられないから。僕が成功かなと思うのは、15年ばかり間伐をやっているのです、年に一遍行って。向こう、東京の人は年に2回あるのだけれども、15年続けている間にそういうことをやるNPOは三つできたのです、参加者の中で。これはいいなと思っているのです。それは何かというとすぐ結果が出るから、やっているの間伐なんていうのは。

太田委員 それは確かに。

宇都木委員 行って木を切れば、バアッと日が照ってきたり達成感があるのだ。こんな30年のヒノキを2日間で10本切ったとか。最初はそのうちだった、そういうことによって、ああ、我々もやっぱり自然を守るとか、森林を元気にさせるとかということの大切さがだんだんわかってきて、自分たちでやろうと言って三つできましたよ、大体。

久塚会長 ということなんかに絡めて言うと、1個目のところというのはどういうアドバイスというか、どうなるのでしょうかね、時間の関係であと一言、二言お願いで。

太田委員 私、思うのですけれども、ユースを今すぐく私よかった、いいなと思ったのは、やはりユースの子供たちが今どうにかこう結束しようとしている。そこに本当にうまいコーディネーターというか、そういう団体づくりのそういう例えばあそこのNPOの事務局あたりとか、何か派遣とか何かアドバイスできるような。

久塚会長 私が30歳若かったら昔は大学でやっていたのですけれども、教育で。

太田委員 だれかこういうふうにしていけば人は集まるし、また地域へのあれもPRもできると、その方法論を教えてくれるような、その一番的確なのはあそこのNPOの事務局あたりの人たちが人材を派遣してみたいな。

宇都木委員 だから、それは。

太田委員 できないのですか。

宇都木委員 そういう、いや、活動をしている、そういうことを成功している、比較的広げること成功している、そういう人たちをそのそこへ。

太田委員 ええ、コーディネーターとして。

宇都木委員 行って勉強会に派遣するとか、そうしないと何か。

太田委員 あれとは逆をやったり。

宇都木委員 だから、あそこも交流したり。

太田委員 あの人たち。

宇都木委員 あそこがそもそもコーディネートはそういうことでいいのだけれども、あそこの人たちが何かやると言ったら無理だから。

太田委員 まだ無理。

宇都木委員 コーディネーターぐらいのものですよ。

太田委員 まだ無理ですか。

宇都木委員 だって、市民活動をどれだけやっている人たちがたくさんいるのと言ったら、そんなに簡単にいないでしょう。

太田委員 逆にそのすごく活発にやって成功しているところに、ちょっと小林さんたち何人かが行って、その実際にちょっと研修する場をお出かけになって。

宇都木委員 本当はそれはいいことなのだけれども、受け入れてくれない、多分。

太田委員 受け入れないですか。

宇都木委員 行った人が違和感を感じていづらくなってしまうよ。あなたたち、きのう、きょうやっている人が、おれたちがやっていることが何でわかるのだみたいな話になる。

伊藤委員 ここに対するあれで冒頭の書き方と言ったら、やはり自分たちのやっていることはっきりこう見えるようにすると。

太田委員 そう、そう、そう。

伊藤委員 それと書くとすればこちら辺をこうちょっと……目で書くのだろうな。そのもっと進んでしまうとちょっと非難っぽくなってしまうから。やっていることはわかる。やっていることがみんなが理解できる。そんな書き方とか、常々レポーターの方法をやることとか。

太田委員 何かそれはフォームか何かできないのですか、こういうもっと見える形で。

伊藤委員 フォームでつくればいいのだよ。

太田委員 ですよ。

宇都木委員 外側の意見を取り入れるような仕組みをつくったほうがいいよと。

太田委員 そう、そう。

宇都木委員 そう、それでそういう人たちにも貴重な意見だから、その人たちずっとアドバイザーやってちょうだいねという、そういう包容力があるところはいいのだけれども、あの人には来ると文句ばかり言っているからというのでだんだん呼ばなくなってしまう。

宇都木委員 神奈川の今、CAPというお母さんと子供たちに、子供の安全だとかDV

だとかそういうことをやっている。そのところに私、相談、まだ最初は理事だったのだけれども、やめると言ったら相談役で残ってと言うから相談役で残って、時々1年に2回ぐらい行くのだが、やっぱり外から言ってもらいと少しやっぱりハッとするとところがあるのです。あなた、自己満足だよ、そんなこと、自分たちだけでやったって解決しないよと言ってあげると。

だから、そういうのは外の意見は大事だから、客観的に見て広げられるにはどうしたらいいかということを経えず追究できるような外の意見も尊重しなさいよという、外部からの意見を、アドバイスを求めるようなそういう仕組みをつくったほうがいいですよというわけ。それは意見としてはいいのではないですか。

太田委員 何か口頭でこうお話ししてくださった分には、ああ、それを書けばよかったのにみたいなのがすごく後半多かったと思うのです。

久塚会長 ようやくそれが。

太田委員 ようやくその出てきた。

久塚会長 ただ、やっぱりしゃべっていることも、質的なことというより何かあれなのだ、今の学生さんに多い。どうだったと言ったら、すごく感激したとか、よかったとか。

太田委員 うん、具体的ではないですよ。

久塚会長 それ、うーん、もうちょっとどうにかならないかと。

太田委員 去年からことし、去年も同じ指摘を多分どなたかされたと思うのですけれども、やはりその文章の、しょうがない。

伊藤委員 それと突発的に出てきたものが、あたかも計画のように組み込まれたような話し方。例えばボランティアサークル、サポーターが出てきた、よかった。そういうことを考えていなかったのか、計画に。

太田委員 うん、そうですね。

伊藤委員 まずそういうことなのよ、計画は、野口さんが言っていたけれども。そういうことが組み立てられてきたらいいのだが、突発的にできたのなんて評価しないのだ、計画上ないことは。

太田委員 そうそう、せっかくそれはただ体験、よかったというだけで終わっていますので。

伊藤委員 うん、そう。

宇都木委員 一生懸命になり過ぎてしまって外のことなんて気がつかないのよ、自分た



ちのことについては。それが本当だと思うよ。毎日毎日のことできゅうきゅうとしているの、実際は。

太田委員 大変だと思います。

宇都木委員 だから、客観的に見るだとか、そういうところに。

久塚会長 これ、団体の住所はどこだっけ。ちょっと見学に行ってみようかな。

伊藤委員 南町ではなかった？

太田委員 活動場所は大久保だけれども、場所は早稲田。

事務局 早稲田南町です。

久塚会長 はいはい、では二つ目のところに。1個目のところは大体皆さんの意見というのはいろんな角度から出てきたけれども、同じところにこう行っているようなご意見だったと思うのです。

二つ目も多分いろんな角度から意見が出てくると思うけれども、ご要望とか意見というのは一、二カ所に集中するのではないかなと思いますが、どう、いかがですか、街角のほうは。

太田委員 何かこう。

宇都木委員 芸団協興行にならないようにしてもらいたいです。

伊藤委員 うん。

野口委員 そうだよ、やっぱり出演したら金かかるよ、これ。

太田委員 かかると。

伊藤委員 これ、コンセプトとすれば。

野口委員 区が金出してやっているからいいけれども、出さなくなってしまったらね。

伊藤委員 育ち盛りの芸人、アーティスト。

太田委員 そうそう。

伊藤委員 そういうのを発掘して、それを世に行くということと、その人たちを区にある遊休的に使用されていない場所を使ってやるという、そのプラスの効果をやっているわけじゃない。それで、そのプラスの効果というのは地域が発展していく、活況を呈するという。だから、そこの一番下のコンセプトが忘れられてしまってやればいい。

太田委員 そうそう。

伊藤委員 イベントをやればいいという形になれば。

久塚会長 何かみんなが好きなことを言っている。

伊藤委員 だから、大きなところと組めば簡単だし、相手のいわゆる。だけど、それは。

久塚会長 みんな優しいね、本人たちいるところでは。

伊藤委員 金との問題の絡みでいつできるかわからない、いつこれになるかわからない。で、それでは情報の発信にならないのだ。こういうところが使えますよ、申し込んだから使えますよと言ったって、これだけ金がかかりますよでは困ってしまうだけだから。

久塚会長 野口さんなんかはどう、二つ目は、さっきやっぱりアマチュアとか素人とか。

野口委員 人が集まるような公共の場というのは、うちへ発見と言ったら僕らが都庁に勤めていたけれども、あの都民広場。あそこなんかバンバン使って、もうしょっちゅうあいているのだから、ああいうところはもうしょっちゅう人が行っているし。

太田委員 広いところがね。

野口委員 都庁の展望台に行く人がどんどん観光で来ているのだから、そういったところでやればいいのです。

宇都木委員 あれ、大道芸人が何かをやっているじゃない、しょっちゅう。

野口委員 そうそう、やっています、やっています。だから、ああいうところを、そういうところを。

太田委員 常時ね。

野口委員 うん、もうそういうところもやっぱりスポットとして。

伊藤委員 やはり活況を呈するというのは毎月、さっき言ったように土曜日なら土曜日のやはり1時から3時までそこで来て常にやっていますよと言うと来るじゃない。

野口委員 みんなね。

伊藤委員 行ったときにやっているか、やっていないかわからないのでは行こうと思わないし。

野口委員 ギターやりたいやつは一緒にするだろし、だから。

伊藤委員 そう、どこのバイトでもね。

野口委員 うん、やらないところで。

伊藤委員 継続性が、継続性がないのだもの。

太田委員 この芸団協のこの。

野口委員 ちょっと構え過ぎだよ。

伊藤委員 そのスポットだよ、スポットがスポットになっている。

久塚会長 ちょっと太田さん。

太田委員 すみません。芸団協のやはりこのさっき私の質問とも関係するのですけれども結構高いのです、出演料1回につき20万とか、会場設営費も20万でしょう。

伊藤委員 20万では。

太田委員 だから、ざっと一つやるについて40～50万かかってしまう。これではちよっと続かない。

宇都木委員 だから、これしかできないのだ。

太田委員 続かない、続かない。

宇都木委員 これしかできないの、回数が。

太田委員 ですね。だから、そうではなくて例えば伊藤委員がおっしゃったように、本場に吉本からでもどこでもいいのですけれども、吉本が地元なので。新しい人たち、もう場所が欲しい人たちは結構いると思うので、そういう人を育てるという意味でやると、こんなにお金かからなくて、もしかしたら自分たちである程度こうスポンサー見つけながらでもやりたいと言う人も出てくると思う。その人をこう育ててほしいなど。

野口委員 そうだよな。

太田委員 こういう大がかりなものはもういろんなところでやっているの、ホールでも何でも。別にやるなどは言わないけれども、やるなどは言わないが。

野口委員 ただでやれる。

久塚会長 芸団協がどうこうではなくて。

太田委員 やるなどは言わないけれども。

久塚会長 新宿のまちをどうするというのを考えたときに、このやり方がどうですかと。新宿のこの。

太田委員 このやり方は続かなさそう、お金がかかり過ぎ。

久塚会長 文化芸術の鑑賞を参加することが。

野口委員 ただ、会場をそのあっせんするにしても何にしても、何かそこに窓口がなければいけないよね。

伊藤委員 そう。

太田委員 そう、そう。

野口委員 それは窓口ほどこと言うとやっぱり。

伊藤委員 もうここがやると決まっていたのだけれども。

太田委員 ああ。

野口委員 芸団協、違うでしょう。

伊藤委員 違う、違う、この受けたところが。

太田委員 ああ、そうか。

伊藤委員 で、そこがいろいろデータをとったり全部やって発信。だから、そこに発信が出ていたじゃない、情報発信と。それはスポットの、街角スポットの情報発信ができるという。

野口委員 事務局をつくってやっていくという。

伊藤委員 そうそう。

久塚会長 だから、一覧表を。

宇都木委員 新宿でもいろんなところがいろんなことをやっているのだから、例えば生涯学習センターでやっていたり、何かいろんなところがやっている。もう1回あれを。

久塚会長 集約でしょう。

太田委員 ちょっときれいに。

宇都木委員 集約して。

久塚会長 特に無料、自由。

太田委員 有料か。

久塚会長 有料で、手続き方法1カ月前からとかいうのも。

太田委員 そう、そう。

宇都木委員 それで伊藤さんが言うように中央公園だとか都庁の。

太田委員 都庁の。

宇都木委員 何とか広場は週に第3土曜日が何時から何時まで開放とか、そうやっていろんな。

太田委員 作戦をつくったら。

宇都木委員 そうすると自主的にそういうところを管理する人たちが、そこでやりたい人たちが自主的に管理するようにできてくるよ、それは。自主管理しますよ。

久塚会長 そうですね、それを民間が持っている空間まで入れて、音楽だったら業者が、能楽とか音楽館とか、ああいうのまで全部入れ込んでいったら、かなりのマップはできると思うのです。

太田委員 すごい。

宇都木委員 そう。ビルなんかでも、あそこの高層ビルのところなんかしょっちゅうや

っているじゃない、昼休みコンサートだとか。ああいうのを一緒に組み込んでもらって。

太田委員 そう、そう、そう。

宇都木委員 それで、損保ジャパンの美術館なんかも素人のために1ますあげてくださいとか。

太田委員 ああ、そうそう、それ、あってもいいです。

宇都木委員 ねえ、そうやって。

太田委員 都民の日とかあけてほしい。

宇都木委員 区民の。

太田委員 区民の日？

宇都木委員 区民の。

久塚会長 どう、美術館とか。

竹内委員 宇都木さんがやったほうがいいみたいなことを言って。

宇都木委員 やっぱり商売になってしまうから、ビジネスになってしまうから、芸団協は。だから、最低線は守らなければいけないのです。そうでないとダンピングで集めて、それを守るために、ダンピングを守るために芸団協ができているのだから、芸団協自身がダンピングしてはいけないわけです。

伊藤委員 芸人の出演料は決まっているのだから。

宇都木委員 うん、その出演料、この出演料でやれる人たちを呼んでくるだけの話だから。

太田委員 そう、そう。

久塚会長 個人ですと今度は所属する事務所がうるさいから、私、ボランティアでただ出たいわと言ったらやめてくださいという話になるので。

竹内委員 そういう何か広げようとする目的が明確になっていないから。

久塚会長 うん、そう。

竹内委員 最初のもそうなのだけれども、その軸がしっかりしないから、方向性が定まらない。

伊藤委員 ただ、あいた場所を使ってやればいいのか、その場所をリストアップすればいいという。そこはできるだろうけれども、今言ったところがだから。

宇都木委員 少しそうやってやっぱり議論したほうがいいのか、議論したほうがいいのか。

太田委員 あともう一つがやはりこう皆さんがおっしゃったように。

野口委員 だから、出演者についてもどういう人たちがという。

太田委員 そう、そう、そう。

野口委員 あれが出てこないと。

太田委員 そういうのをこうウェブ上とかでも公表できて、お互いに共有できたら。

竹内委員 最初にお答えになったけれども。

伊藤委員 最初からね。

太田委員 去年そうでしたね。

久塚会長 ほかにないですか。

野口委員 街角スポットのあれです、その窓口も明確化する必要があるということですね。渉外能力って、交渉能力とかいろんなのはあって、そういったものもその事務局にはなくてはいけないわけです。だから、そういうのには多少そういったことに精通している人になってもらわないといけないよね、そういう交渉するとか、こう街角スポットとして地域のここがいいとなったら、それについてはいろんなもう交通整理すべきことがいっぱいあるわけですから、それをあれするとなると交渉能力がある人がやっぱり対応しなくてはいけないと思うのですけれども。

伊藤委員 場所の交渉というのは、あれを聞いていると何か場所と出し物がセットになって持っていつているような気がするのだ。場所だけをまず借りるという設定ではなくて、呼べるというセットに。オペラシティでもそうじゃない、大体こういう企画で。企画を持っているよ、場所借りではなくて。これはどっちかというところ場所借りの問題だよな。

野口委員 そうなのです。

伊藤委員 これはね、この事業計画は。そこからスタートだから、セットで持っていくというのは変だよな。

宇都木委員 あれ、東京駅の丸の内口なんかは東京駅が、あそこの東京駅のあそこに入っているあれはJRの子会社だけれども、そういうところがみんなが金を出し合って社会貢献で演奏活動なんかもしょっちゅうやっているではないですか。あれはそういうことなのだ。だから、京王のこれ出たのだから、京王はそれは喜ぶよな、出てくれれば、ただで出てくれれば。京王がやっているのだと思うもの、あそこへ行った人は、ああ、京王はハイカラなことをやるなど。

伊藤委員 そうそう、京王がやっていると思う、それは。

宇都木委員 そうそう、京王がやっていると思う、よほど書いておかないと。

伊藤委員 そうか、協働事業と書いておかないと。

宇都木委員 京王がやっていると思う、京王がお客さんサービスにやっていますと写らない。

伊藤委員 どうだったろう、そこは。

久塚会長 でも、使用とか所有権がある中で必要以上の人をとどめさせたり、大きな音を出したりということ、区役所の中でやるのだったら区役所で許しを得なければいけないし、小田急の中でやるのだったら小田急の許しを得なければいけない。だから、京王なら京王でやらせてもらうのだったら、やっぱり京王がやっているというぐらいでもいいわというようになってしまうわけでしょうね。それ、新宿区と書くと、ではやらないでくださいという話になってしまうかもしれない。太っ腹になってお互いにいいことをしましょうよという話になるのだろうと思う。

野口委員 これの新宿区協働事業なんてもうすごい小さい字で書いてあるのです。だから、これ、もっとこうデンと協働事業とほしい。看板の中に見えないほどちっちゃいのだよ（笑）。

宇都木委員 ほら、ここに看板あったじゃない。それで本当に小さい。

野口委員 小さいのです、物すごい、あれっと思って。

宇都木委員 おれなんか見えない、こんなだもの、ほら。

太田委員 見えない。

宇都木委員 見えないよ。

久塚会長 まあ、大きくしたらそれこそ嫌じゃない。

野口委員 クレームつけて、看板つくるときには協議しなさいと言って。

久塚会長 いや、やっぱり役所の名前書かれていたら、どうせという感じに見えてしまうから、もう学習してそういうことを出さなくなったのではない。

太田委員 いや、逆に私、何か聞いたことがある。えっ、今、区役所ってこんなこともやるのと聞かれたことがあるのです、逆に。だから、ああ、変わっているなという印象を持たれたのだなと、すごく私もうれしくて。だから、逆転の発想で大きく、こんなすてきなことやるのというふうに、新宿はちょっとこう明るい雰囲気、こう変わったというものありかなとそのときに思ったのですけれども。

野口委員 区の事業をせっかくね。

久塚会長 はい、わかりました。時間になりましたので、事務局のほうから追加、次回

の予定などありましたらお願いします。

事務局 それでは、本日午後にきょうのご出席の5名の委員様あてに電子データのほうを送らせていただきます。資料の2をお開きいただきたいのですけれども、大変恐縮なのですが11月5日の火曜日に締め切りとさせていただいておりますので、11月6日朝に私が出勤して来たときに、各委員の評価が入っているという状態であればというふうに思っているところでございます。

それで、台風の影響で本来ならば今日もう評価点だったのですが、11月11日月曜日に評価点の決定と評価書コメントについて行いたいと思っております。

久塚会長 はい、では長くなりましたけれども、今日の会議を終えたいと思います。来月10日も引き続きよろしくお願いします。ありがとうございました。

事務局 ありがとうございました。

— 了 —